

高野聖

泉鏡太郎

青空文庫

第一

「参謀本部編纂の地図を又繰開いて見るでもなからう、とおも思つたけれども、余りの道ぢやから、手を触るさへ暑くるしい、旅の法衣の袖をかゝげて、表紙を附けた折本になつてるのを引張り出した。

飛騨から信州へ越える深山の間道で、丁度立休らはうといふ一本の樹立も無い、右も左も山ばかりぢや、手を伸ばすと達きさうな峯があると、其の峯へ峯が乗り巔が被さつて、飛ぶ鳥も見えず、雲の形も見えぬ。

道と空との間に唯一人我ばかり、凡そ正午と覺しい極熱の
 太陽の色も白いほどに冴え返つた光線を、深々と頂い
 た一重の檜笠に凌いで、恚う凶面を見た。」
 旅僧は然ういつて、握拳を両方枕に乗せ、其で額を
 支へながら俯向いた。

道連になつた上人は、名古屋から此の越前敦賀の旅籠
 屋に来て、今しがた枕に就いた時まで、私が知つてる限り余り仰
 向けになつたことのない、詰り傲然として物を見ない質の人
 物である。

一 体東海道掛川の宿から同汽車に乗り組んだと覺えて居
 る、腰掛の隅に頭を垂れて、死灰の如く控へたから別段目

にも留とまらなかつた。

尾張をはりの停車場ステーションで他の乗組員のりくみあんは言合いひあはせたやうに、不残のこらず下お

りたので、函はこの中なかには唯ただ上しやう人うにんと私わたしと二人ふたりになつた。

此この汽車きしやは新橋しんぼしを昨夜九時半さくやくじはんに発たつて、今夕こんせき敦賀つるがに入はいらう

といふ、名古屋なごやでは正午ひるだつたから、飯めしに一ひと折をりの鮎すしを買かつた。旅た

僧びそうも私わたしとおなじそ其の鮎すしを求めたのであるが、蓋ふたを開あけると、ばら

くと海苔のりが懸かつた、五目飯ちらしの下等かとうなので。

(やあ、人參にんじんと干瓢かんべうばかりだ、)と疎匆そゝツかしく絶叫ぜつけうした、

私わたしの顔かほを見て旅僧たびそうは耐こらへ兼ねたものと見みえる、吃くつ々と笑わらひ出だ

した、固もとより二人ふたりばかりなり、知ちか己づきにはそれから成なつたのだが、

聞きけば之これから越前ゑちぜんへ行いつて、派は違ちがふが永平寺えいへいじに訪たづねるものが

ある、但し敦賀に一泊とのこと。

若狭へ帰省する私もおなじ処で泊らねばならないのであるから、

其処で同行の約束が出来た。

渠は高野山に籍を置くものだといつた、年配四十五六、柔

和な、何等の奇も見えぬ、可懐い、おとなしやかな風采で、

羅紗の角袖の外套を着て、白のふらんねるの襟巻を占め、

土耳其形の帽を冠り、毛糸の手袋を箆め、白足袋に、日和下駄

で、一見、僧侶よりは世の中の宗匠といふものに、其よ

りも寧ろ俗歟。

(お泊りは何方ぢやな、)といつて聞かれたから、私は一人旅

の旅宿の詰らなさを、染々歎息した、第一盆を持つ

て女中が坐睡ぢよちう むねむりをする、番頭ばんとうが空世辞そらせじをいふ、廊下らうかを歩行あるく
 とじろくく目めをつける、何なにより最も耐たへ難がたいのは晩飯ばんめしの支度したくが
 済すむと、忽たちまあかりち灯あんどうを行燈かに換かへて、薄暗うすぐらい処ところでお休やすみなさいと
 命めいれい令れいされるが、私わたしは夜よが更ふけるまで寝ねることが出来できないから、
 そのあひだ其間このちまの心持こころもちといつたらない、殊ことに此頃このごろの夜よは長ながし、東と
 京うきやうを出でる時ときから一晩ひとばんの泊とまりが氣きになつてならない位くらゐ、差支さしつか
 へがなくば御僧おんそうと御一所ごいつしよに。
 こころよなづ快ほくりくちほうく領あんぎやいて、北陸地方せつを行脚りよてんの節せつはいつでも杖つゑを休やすめる香か
 取屋とりやといふのがあつた、旧もとは一軒いつけんの旅りよてん店りよてんであつたが、一人女ひとりむすめ
 の評判ひやうばんなのがなくなくなつてからは看板かんばんを外はづした、けれども昔むかし
 から懇意こんいな者ものは断ことらず留とめて、老人としより夫婦ふうふが内端うちばに世話せわをして呉くれ

る、宜しくば其へ。其代といひかけて、折を下に置いて、
(御馳走は人参と干瓢ばかりぢや。)
と呵々と笑つた、慎深さうな打見よりは氣の軽い。

第二

岐阜では未だ蒼空が見えたけれども、後は名にし負ふ北国
空、米原、長浜は薄曇、幽に日が射して、寒さが身に
染みると思つたが、柳ヶ瀬では雨、汽車の窓が暗くなるに従ふて、
白いものがちらちら交つて来た。

(雪ですよ。)

(然やうぢやな。)といつたばかりで別に気に留めず、仰いで空
 を見やうともしない、此時に限らず、賤ヶ岳が、といつて古
 戦場を指した時も、琵琶湖の風景を語つた時も、旅僧は唯
 頷いたばかりである。

敦賀で悚毛の立つほど煩はしいのは宿引の悪弊で、其日も
 期したる如く、汽車を下りると停車場の出口から町端へかけ
 て招きの提灯、印傘の堤を築き、潜抜ける隙もあらな
 く旅人を取囲んで、手ン手に喧しく己が家号を呼立てる、中
 にも烈しいのは、素早く手荷物を引き手繰つて、へい有難う様で、
 を喰はず、頭痛持は血が上るほど耐へ切れないのが、例の下を
 向いて悠々と小取廻に通抜ける旅僧は、誰も袖を曳かな

かつたから、幸其後に跟いて町へ入つて、吻といふ息を吐いた。

雪は小止なく、今は雨も交らず乾いた軽いのがさら／＼と面を

打ち、宵ながら門を鎖した敦賀の町はひつそりして一条二条縦

横に、辻の角は広々と、白く積つた中を、道の程八町ばかり

りで、唯ある軒下に辿り着いたのが名指の香取屋。

床にも座敷にも飾といつては無いが、柱立の見事な、畳の

堅い、炉の大なる、自在鍵の鯉は鱗が黄金造であるかと思は

るる艶を持つた、素ばらしい竈を二ツ並べて一斗飯は焚けさう

な目覚しい釜の懸つた古家で。

亭主は法然天窓、木綿の筒袖の中へ両手の先を窺まし

て、火鉢の前でも手を出さぬ、ぬうとした親仁、女房の方は

愛嬌のある、一寸世辞の可い婆さん、件の人參と干瓢の話を旅僧が打出すと、莞爾々々笑ひながら、縮緬雑魚と、鰈の干物と、とろろ昆布の味噌汁とで膳を出した、物の言振取做なんど、如何にも、上人とは別懇の間と見えて、連の私の居心の可さと謂つたららない。

廳て二階に寢床を慥へてくれた、天井は低い、梁は丸太で一一抱もあらう、屋の棟から斜に渡つて座敷の果の廂の処では天窓に支へさうになつて居る、巖丈な屋造、是なら裏の山から雪顔が来てもびくともせぬ。

特に炬燵が出来て居たから私は其まゝ嬉しく入つた。寢床は最上一組同一炬燵に敷いてあつたが、旅僧は之には来らず、横に

まくらなら
枕を並べて、火の気のない臥床に寝た。

寝るとき、上人は帯を解かぬ、勿論衣服も脱がぬ、着たまゝ

まる

丸くなつて俯向形に腰からすつぽりと入つて、肩に夜具の袖を

かかると手を突いて畏つた、其の様子は我々と反対で、顔に

まくら
枕をするのである。程なく寂然として寝に着きさうだから、汽

車の中でもくれ／＼\ いったのは此処のこと、私は夜が更けるま

で寝ることが出来ない、あはれと思つて最う暫くつきあつて、而

して諸国を行脚なすつた内のおもしろい談をといつて打解け

て幼らしくねだつた。

すると上人は頷いて、私は中年から仰向けに枕に着かぬ

のが癖で、寝るにも此儘ではあるけれども目は未だなか／＼

が癖で、寝るにも此儘ではあるけれども目は未だなか／＼

が癖で、寝るにも此儘ではあるけれども目は未だなか／＼

が癖で、寝るにも此儘ではあるけれども目は未だなか／＼

が癖で、寝るにも此儘ではあるけれども目は未だなか／＼

が癖で、寝るにも此儘ではあるけれども目は未だなか／＼

が癖で、寝るにも此儘ではあるけれども目は未だなか／＼

が癖で、寝るにも此儘ではあるけれども目は未だなか／＼

が癖で、寝るにも此儘ではあるけれども目は未だなか／＼

えて居る、急に寐着かれないのはお前様と同一であらう。出家のいふことでも、教だの、戒だの、説法とばかりは限らぬ、若いの、聞かつしやい、と言って語り出した。後で聞くと宗門名譽の説教師で、六明寺の宗朝といふ大和尚であつたさうな。

第三

「今に最う一人此処へ来て寝るさうぢやが、お前様と同国ぢやの、若狭の者で塗物の旅商人。いや此の男なぞは若いが感心に実体な好い男。」

わし いまなし じよびらき
 私が今話の序開をした其の飛驒の山越を遣つた時の、麓
 の茶屋で一所になつた富山の売薬といふ奴あ、けたいの悪い、
 ねぢくした厭な壮佼で。

先づこれから峠に掛らうといふ日の、朝早く、尤も先の泊は
 ものゝ三時位には発つて来たので、涼い内に六里ばかり、其の茶
 屋までのしたのぢやが、朝晴でぢりく暑いわ。

慾張抜いて大急ぎで歩いたから咽が渴いて為様があるまい
 さつそくちやのま おも
 早速茶を飲うと思ふたが、まだ湯が沸いて居らぬといふ。

何うして其時分ぢやからといふて、滅多に人通のない山
 道、朝顔の咲いてる内に煙が立つ道理もなし。

床几の前には冷たさうな小流があつたから手桶の水を汲ま

うとして一寸気がついた。

其といふのが、時節柄暑さのため、可恐い悪い病が流行つて、先に通つた辻などといふ村は、から一面に石灰だらけぢやあるまいか。

(もし、姉さん。)といつて茶店の女に、

(此水はこりや井戸のでござりますか。)と、極りも悪し、もじく聞くとどの。

(いんね川のでございす。)といふ、はて面妖など思つた。

(山したの方には大分流行病がございしますが、此水は何から、辻の方から流れて来るのではありませんか。)

(然うでねえ。)と女は何気なく答へた、先づ嬉しやと思ふと、

お聞きなさいよ。

此処こゝに居ゐて先刻さつきから休やすすんでござつたのが、右みぎの売薬ばいやくぢや。

此この又また万金丹まんきんたんの下廻したまはりと来た日きひには、御存ごぞんじの通とほり、千筋せんすぢ

の単衣ひとへに小倉こくらの帯おび、当節たうせつは時計とけいを挟はさんで居ゐます、脚絆きやはん、股もゝひ

引き、之これは勿論もちろん、草鞋わらぢがけ、千草木綿ちくさもめんの風呂敷包ふろしきづゝみの角かどばつた

のを首くびに結ゆはへて、桐油合羽とういうがつぱを小ちいさく畳たゝんで此奴こいつを真田紐さなだひもで右みぎ

の包つゝみにつけるか、小弁慶こべんけいの木綿もめんの蝙蝠傘かうもりがさを一本ほん、お極きまりだね。

一寸ちよいとみ見ると、いやどれもこれもこくめい克明ふんべつで、分別ぶんべつのありさうな

顔かほをして。これが泊とまりに着つくと、大形おほがたの裕衣ゆかたにかは変かつて、帯おび広解ひろげ

で焼耐せうちうをちびりく遣やりながら、旅籠屋はたごやの女をんなのふとつた膝ひざへ脛すね

をあ上げやうといふ輩やからぢや。

(これや、法界坊、)

なんて、天窓から嘗めて居ら。

(異なことをいふやうだが何かね世の中の女が出来ねえと相場が極つて、すつぺら坊主になつても矢張り生命は欲しいのかね、不思議ぢやあねえか、争はれねもんだ、姉さん見ねえ、彼で未だ未練のある内が可いぢやあねえか、)といつて顔を見合はせて二人で呵々と笑つたい。

年紀は若し、お前様、私は真赤になつた、手に汲んだ川の水を飲みかねて猶予つて居るとね。

ポンと煙管を払いて、

(何、遠慮をしねえで浴びるほどやんなせえ、生命が危くなり

や、薬くすりを遣やらあ、其その為ために私わしがついてるんだぜ、喃姉なねえさん。おい、
 其それだつても無た銭づぢやあ不可いけねはゞか 神方しんぼう万金まんきん丹たん、一貼てふ、
 三百びやくだ、欲ほしくば買かひな、未まだ坊主ぼうずに報捨ほうしやをするやうな罪つみは造つく
 らねえ、其それも何どうだお前まへいふことを肯きくか、)といつて茶店ちやみせ
 の女をんなの背せ中なかを叩たたいた。

私わしは匆さう々くに遁出にげだした。

いや、膝ひざだの、女をんなの背せ中なかだのといつて、いけ年としを仕つかまつた和尚おしやう
 が業げ体ふていで恐おそれ入いるが、話はなしが、話はなしぢやから其処そこは宜よろしく。」

第四

「私も腹立紛れぢや、無暗と急いで、それからどんく山やまの裾すそを田圃道たんぼみちへ懸かる。

半町はんちやうばかり行くと、路みちが恚いかう急きふに高たかくなつて、上のぼりが一ヶいつ処しよ、横よこから能よく見みえた、弓ゆみ形なりで宛まるで土つちで勅使橋ちよくしぼしがかゝつてるやうな。上うへを見みながら、之これへ足あしを踏懸ふみかけた時とき、以前いぜんの薬くすり売うりがすたく遣やつて来きて追おひつたが。

別べつに言葉ことばも交かはさず、又またものをいつたからといふて、返事へんじをする気きは此方こつちにもない。何処どこまでも人ひとを凌しのいだ仕打しうちな薬くすり売うりは流しりめにかけて故わざとらしう私わしを通越とほりこして、すたく前まへへ出でて、ぬつと小山こやまのやうな路みちの突とつ先さきへ蝙蝠傘かうもりがさを差さして立たつたが、其そのまゝ向むかふへ下おりて見みえなくなる。

其その後あとから爪つまさき先あが上り、聽やがてまた太鼓たいこの胴どうのやうな路みちの上うへへ体からだが乗のつた、其それなりに又また下くだりぢや。

売ばい葉やくは先さきへ下おりたが立たち停どまつて頻しきりに四辺あたりを瞻みまはして居ゐる様子やうす、
 執しふ念ねん深ぶかく何なにか巧たくんだか、と快こゝろからず続つづいたが、さてよく見みると
 仔細しさいがあるわい。

路みちは此こゝ処こゝで二条すぢになつて、一条すぢはこれから直すぐに坂さかになつて上のぼりも急きふなり、草くさも両りやう方ほうから生おひ茂しげつたのが、路みち傍ばたの其その角かど
 と此こゝ処こゝにある、其それこそ四抱かゝへさうさな、五抱かゝへもあらうといふ一本ほんの檜ひのき
 の、背うしろ後うねへ畝うねつて切きり出だしたやうな大巖おほいが二ツ三ツ四ツと並ならんで、
 上うへの方ほうへ層かさなつて其その背うしろ後うしろへ通つうじて居ゐるが、私わしが見けん当たうをつけて、
 心こゝろ組くんだのは此方こゝちではないので、矢張やっばい今いままで歩ある行あるいて来きた其その

中の広いなだらかな方が正しく本道、あと二里足らず行けば山
 になつて、其からが峠になる筈。

唯見ると、何うしたことかさ、今いふ其檜ぢやが、其処らに何
 もない路を横截つて見果のつかぬ田圃の中空へ虹のやうに突出
 て居る、見事な。根方の処の土が壊れて大鰻を捏ねたやうな
 根が幾筋ともなく露はれた、其根から一筋の水が颯と落ちて、
 地の上へ流れるのが、取つて進まうとする道の真中に流出し
 てあたりは一面。

田圃が湖にならぬが不思議で、どうくと瀬になつて、前途に
 一叢の藪が見える、其を境にして凡そ二町ばかりの間宛で川ぢや。
 礫はばらく、飛石のやうにひよいくと大跨で伝へさうに

ずっと見^みごたへのあるのが、それでも人^{ひと}の手^てで並^{なら}べたに違^{ちが}ひはな
い。

もつときもの
尤も衣服^{いふく}を脱^ぬいで渡^{わた}るほどの大^{おほ}事^{ごと}なのではないが、本^{ほん}街^{かい}道^{だう}
には些^ちと難^{なん}儀^ぎ過^すぎて、なかく馬^{うま}などが歩^{ある}行^かれる訳^{わけ}のものでは
ないの。

売^{ばい}薬^{やく}もこれ^{まよ}で迷^{まよ}つたのであらうと思^{おも}ふ内^{うち}、切^{きれ}放^{はな}れよく向^むき
変^かへて右^{みぎ}の坂^{さか}をすたくくと上^{のぼ}りはじめた。

見^みる間^まに檜^{ひのき}を後^{しろくゞ}に潜^ぬり抜^ぬけると、私^{わし}が体^{からだ}の上^{うへ}あたりへ出^でて下^{した}を
向^むき、

(おい、松^{まつ}本^{もと}へ出^でる路^{みち}は此^{こつち}方^ちだよ、)といつて無^む雑^ざ作^{さく}にま
た五^ご六^{ろく}歩^ぼ。

いはあたま はんしん
岩の頭へ半身を乗出して、

（茫然してると、木精が攫ふぜ、昼間だつて用捨はねえよ。）
あざけ ごと
と嘲るが如く言ひ棄てたが、
やが いは かげ はい
臆て岩の陰に入つて高い処の草に隠れた。

しばら
暫くすると見上げるほどな辺へ蝙蝠傘の先が出たが、木の枝
とすれ〜になつて茂の中に見えなくなつた。

（どっこいしよ、）と暢気なかけ声で、其の流の石の上を飛
々\ ったは き
々に伝つて来たのは、呉座の尻当をした、何にもつけない天
秤棒を片手で担いだ百 姓ぢや。」

第五

「前刻さつきの茶店ちやみせから此処こゝへ来るまで、売薬ばいやくの外ほかは誰たれにも逢あはな
んだことは申まを上しあげるまでもない。

今別れ際いまかぎはに声こゑを懸かけられたので、先方むかうは道中だうちうの商売人しやうばいにんと
見たみゞけに、まさかと思おもつても氣迷きまよひがするので、今朝けさも立たちぎ
はによく見みて来た、前まへにも申まをす、其その図面づめんをな、此処こゝでも開あけて
見みやうとして居ゐた処ところ。

(一) 一寸ちよいと伺うかがひたう存ぞんじますか、)

(これは、何なんでござりまする、) と山国やまぐにの人ひとなどは殊ことに出家しゆつげ
と見みると丁寧ていねいにいつてくれる。

(いえ、お伺うかがひ申まをしますまでもございませませんが、道みちは矢張やっぱりこれを

素直まっすぐに参まゐるのでございませうな。

(松本まつもとへ行ゆかつしやる？ あゝ、本道ほんだうぢや、何なにね、此間こゝ間ひだ

の梅雨つゆに水みづがで出てとてつもない川かはさ出来できたでがすよ。)

(未だまずつと何処どこまでも此水このみづでございませうか。)

(何なんのお前まへ様さま、見みたばかりぢや、訳わけはござりませぬ、水みづになつ

たのは向むかふの那あの藪やぶまで、後あとは矢張やっぱりこれと同一道おんなじみち筋すぢで山やままで

は荷車にぐるまが並ならんで通とほるでがす。藪やぶのあるのは旧大いお邸もおほきの医者やしき

様まの跡あとでな、此処こゝ等いらはこれでも一ツの村むらでがした、十三年前ねぜんの

大水おほみづの時とき、から一面めんに野良のらになりましたよ、人死ひとしにもいけえこ

と。御坊ごぼう様さま歩行あるきながらお念仏ねんぶつでも唱となへて遣やつてくれさつし

やい)と問とはぬことまで親切しんせつに話はなします。其それで能よく仔細しさいが解わかつ

て確たしかになりはなつたけれども、現げんに一人ひとり踏迷ふみまよつた者ものがある。

（此方こつちの道みちはこりや何処どこへ行くので、）といつて売薬ばいやくの入はいつた
 左手ゆんでの坂さかを尋ねたづねて見みた。

（はい、これは五十年ねんばかり前まへまでは人ひとが歩行あるいた旧道きうだうでがす。
 ヤツぱりしんしうで矢張さき信州しんしうへ出でまする、前まへは一つで七里りばかり総体そうたい近ちかうござり

ますが、いや今いま時往來ときわうらいの出来できるのぢやあござりませぬ。去きよね

年ねんも御坊様おぼうさま、親子連おやこづれの順じゆん礼れいが間違まちがへて入はいつたといふで、

はれ大變たいへんな、乞食こじきを見みたやうな者ものぢやといふて、人命じんめいに代かはり

はねえ、追おつかけて助たすけべいと、巡査おまはりさま様が三人にん、村むらの者ものが十二じふに

人にん、一組くみになつて之これから押登おしのぼつて、やつと連つれて戻もどつた位くらゐで

がす。御坊様おぼうさまも血氣けつきに逸はやつて近道ちかみちをしてはなりましねえぞ、草く

臥たひれて野宿のじゆくをしてからが此処こゝを行ゆかつしやるよりは増ましでござるに。はい、氣きを着きつけて行ゆかつしやれ。)

此処こゝで百姓ひやくしやうに別わかれて其その川かはの石いしの上うへを行ゆうとしたが弗ふと猶た予めつたのは売薬ばいやくの身みの上うへで。

まさかに聞きいたほどでもあるまいが、其それが本ほん当たうならば見殺みごろしぢや、何どの道みわたし私しは出しゆ家つけの体からだ、日ひが暮くれるまでに宿やどへ着ついて屋根やねの下したに寝ねるには及およばぬ、追お着ついて引ひ戻もどして遣やらう。罷まかりちが違ちがふて旧道きうだうを皆歩みなある行おいても怪けしうはあるまい、恚かういふ時じ候こうぢや、おほむゆん狼おほむゆんの春はるでもなく、魑魅魍魎ちみまうりやうの汐しほさきでもない、まゝよ、と思おもふて、見送みおくると早はや親しん切せつな百姓ひやくしやうの姿すがたも見みえぬ。

(可よし。)

おもひき
 思切つて坂道に取つて懸つた、
 血氣に逸つたでは固よりない、
 今申したやうでははずつと最
 う悟つたやうぢやが、いやなかくの憶病者、川の水を飲む
 のさへ氣が怯けたほど生命が大事で、何故又と謂はつしやるか。
 唯挨拶をしたばかりの男なら、私は実の処、打棄つて置い
 たに違ひはないが、快からぬ人と思つたから、其まゝに見棄てる
 のが、故とするやうで、氣が責めてならんだから、
 と宗朝は矢張俯向けに床に入つたまゝ、合掌していつた。
 「其では口でいふ念仏にも濟まぬと思ふてさ。」

第六

「さて、聞かつしやい、私はそれから檜の裏を抜けた、岩の下から岩の上へ出た、樹の中を潜つて草深い徑を何処までも、何処までも。」

すると何時の間にか今上つた山は過ぎて又一ツ山が近づいて来た、此辺暫くの間は野が広々として、前刻通つた本街道より最つと巾の広い、なだらかな一筋道。

心持西と、東と、真中に山を一ツ置いて二条並んだ路のやうな、いかさまこれならば鎗を立てゝも行列が通つたであらう。

此の広ツ場でも目の及ぶ限芥子粒ほどの大きさの売薬の姿も見

ないで、時々、焼けるやうな空を小さな虫が飛歩行いた。

歩行くには此の方が心細い、あたりがぼつとして居ると便

がないよ。勿論飛驒越と銘を打つた日には、七里に一軒十里に

五軒といふ相場、其処で粟の飯にありつけば都合も上の方といふ

ことになつて居ります。其の覚悟のことで、足は相應に達者、

いや屈せずに進んだ進んだ。すると、段々又山が両方か

ら逼つて来て、肩に支へさうな狭いことになつた、直ぐに上。

さあ、之からが名代の天生峠と心得たから、此方も其氣に

なつて、何しろ暑いので、喘ぎながら、先づ草鞋の紐を締直し

た。

丁度此の上口の辺に美濃の蓮大寺の本堂の床下ま

で吹抜ふきぬけの風穴かざあながあるといふことを年経としたつてから聞ききました、が、なかく其処そこどころの沙汰さたではない、一生懸命しやうけんめい、景色けしきも奇跡きせきもあるものかい、お天気てんきさへ晴はれたか曇くもつたか訳わけが解わからず、目ままじろぎもしないですたくと捏こねて上のぼる。

とお前まへ様さまお聞きかせ申まをす話はなしは、これからぢやが、最さい初しよに申まをす通とほり路みちがいかにも悪わるい、宛然まるでひと人かよが通かよひさうでない上うへに、恐おそろいのは、蛇へびで。両方りやうほうの叢くさむらに尾あたまと頭つっことを突つ込んで、のたりと橋はしを渡わたして居ゐるではあるまいか。

私わしは真ま先つさきに出で会つつわした時ときは笠かさを被かぶつて竹たけ杖づゑを突ついたまゝはツいと息いきを引ひいて膝ひざを折をつて坐すわつたて。

いやもう生しやう得とく大だい嫌いきらひ、嫌いきらひといふより恐こ怖わいのでな。

そのとき 其時は先づ人助けにずる／＼と尾を引いて向ふで鎌首

を上げたと思ふと草をさら／＼と渡つた。

漸う起上つて道の五六町も行くと又同一やうに、胴中を乾

かして尾も首も見えぬが、ぬたり!

あつといふて飛退いたが、其も隠れた。三度目に出会つたのが、

いや急には動かず、然も胴体の太さ、譬ひ這出した処でぬら／

＼と遣られては凡そ五分間位は尾を出すまでに間があらうと思

ふ長虫と見えたので已むことを得ず私は跨ぎ越した、途端に下

腹が突張つてぞつと身の毛、毛穴が不残鱗に変つて、顔の色

も其の蛇のやうになつたらうと目を塞いだ位。

絞るやうな冷汗になる気味の悪さ、足が窘んだといふて立つ

て居ゐられる数すうではないから、びく／＼しながら路みちを急いそぐと又またしても居ゐたよ。

然しかも今こんど度は半はんぶん分に引切ひききつてある胸どうから尾をばかりの虫むしぢや、きりくちあをみおそれかきいろしるなが切きり口くちが蒼あをみを帯おびて其それで恚かう黄色きいろな汁しるが流ながれてびくびくと動うごいたわ。

我われを忘わすれてばら／＼とあとへ遁にげ帰かへつたが、氣きが着つけば例れいのが未まだ居ゐるであらう、譬たとひ殺ころされるまでも二度どとは彼あれを跨またぐ氣きはせぬ。あゝ前さつ刻きのお百ひやく姓しやうがものゝ間ま違ちがひでも故ふる道みちには蛇へびが恚かうといつてくれたら、地ぢごく獄くへ落おちても来こなかつたにと照てりつけられて、涙なみだが流ながれた、南なむ無あ阿み弥だ陀ぶつ仏ぶつ、今いまでも悚ぞつ然ぜんとする。「と額ひたひに手てを。」

第七

「果が無いから肝を据ゑた、固より引返す分ではない。旧の処には矢張丈足らずの骸がある、遠くへ避けて草の中へ駆け抜けたが、今にもあとの半分が絡ひつきさうで耐らぬから氣臆がして足が筋張ると、石に躓いて転んだ、其時膝節を痛めましたものと見える。

それからがく／＼して歩行くのが少し難渋になつたけれども、此処で倒れては温気で蒸殺されるばかりぢやと、我身で我身を激まして首筋を取つて引立てるやうにして峠の方へ。

なに みちばた 路傍の草 くさ いきれが可恐 おそろ しい、大鳥 おほとり の卵 たまご 見たやうなも

のなんぞ足許 あしもと にごろ／＼して居る ゐ 茂り しげ 塩梅 あんばい。

又 また 二里 り ばかり大蛇 おろち の畝 うね るやうな坂 さか を、山 やま 懐 ふところ に突 つき 当 あた つて岩 い

角 はかど を曲 まが つて、木 き の根 ね を繞 めぐ つて参 まゐ つたが此 こゝ 処 こゝ のこと あま で余 あま りの道 みち ぢ

やつたから、参謀 さんぼう 本部 ほんぶ の絵 ゑ 図 ず 面 めん を開 ひら いて見 み ました。

何 な 矢 や 張 は 道 だう は同 おんなじ 一 き で聞 き いたにも見 み たのにも変 かは りはない、旧 きう 道 だう は此 こ

方 ち らに相 さう 違 ゐ はないから心 こゝろ 遣 や りにも何 なん にもならず、固 もと より歴 れ とした

図 づ 面 めん といふて、描 ゑが いてある道 みち は唯 ただ 栗 くり の毯 い の上 うへ 赤 あか い筋 すぢ が引 ひ 張 つ ば

あるばかり。

難 なん 儀 ぎ さも、蛇 へび も、毛 け 虫 むし も、鳥 とり の卵 たまご も、草 くさ いきれも、記 し してある

筈 はず はないのぢやから、薩 さつ 張 ぱり と畳 た んで懐 ふ に入 い れて、うむと此 こ の乳 ち

の下へ念仏を唱へ込んで立直つたは可いが、息も引かぬ内に
 情無い長虫が路を切つた。

其処でもう所詮叶はぬと思つたなり、これは此の山の霊であ
 らうと考へて、杖を棄て、膝を曲げ、じり／＼する地に両手を
 ついて、

(誠に済みませぬがお通しなすつて下さりまし、成たけお昼寝の
 邪魔になりませぬやうに密と通行いたしまする。

御覧の通り杖も棄てました。)と我折れ染々々と頼んで額を
 上げるとぎつといふ凄い音で。

心持余程の大蛇と思つた、三尺、四尺、五尺、四方、一丈
 余、段々々と草の動くのが広がつて、傍の谷へ一文字に颯と靡

いた、果は峯も山も一斉に揺いだ、悚毛を震つて立窘むと涼し
 さが身に染みて気が着くと山風よ。

此の折から聞えはじめたのは哄といふ山彦に伝はる響、丁
 度山の奥に風が渦巻いて其処から吹起る穴があいたやうに感
 じられる。

何しろ山霊感応あつたか、蛇は見えなくなり暑さも凌ぎよ
 くなつたので気も勇み足も撈取つたが程なく急に風が冷たくなつ
 た理由を会得することが出来た。

といふのは目の前に大森林があらはれたので。

世の譬にも天生峠は蒼空に雨が降るといふ人の話にも神代
 から杣が手を入れぬ森があると聞いたのに、今までは余り樹がな

さ過ぎた。

今度は蛇のかはりに蟹が歩きさうで草鞋が冷えた。暫くすると暗くなつた、杉、松、榎と処々見分けが出来るばかりに遠いところから幽に日の光の射すあたりでは、土の色が皆黒い。中には光線が森を射通す工合であらう、青だの、赤だの、ひだが入つて美しい処があつた。

時々爪尖に絡まるのは葉の雫の落溜つた糸のやうな流で、これは枝を打つて高い処を走るので。ともすると又常盤木が落葉する、何の樹とも知れずばら／＼と鳴り、かさかさとお音がしてぱつと檜笠にかゝることもある、或は行過ぎた背後へこぼれるのもある、其等は枝から枝に溜つて居て何十年ぶりでは

じめて地の上まで落るのか分らぬ。」

第八

「心細さは申すまでもなかつたが、卑怯な様でも修業の積まぬ身には、恁云ふ暗い処の方が却つて観念に便が宜い。何しろ体が凌ぎよくなつたゝめに足の弱も忘れたので、道も大きに撈取つて、先づこれで七分は森の中を越したらうと思ふ処で、五六尺天窗の上らしかつた樹の枝から、ぼたりと笠の上へ落ち留まつたものがある。

鉛の重かとおもふ心持、何か木の実でもあるか知らんと、

二三度振て見たが附着いて居て其まゝには取れないから、何
心なく手をやつて掴むと、滑らかに冷りと来た。

見ると海鼠を裂たやうな目も口もない者ぢやが、動物には違

ひない。不気味で投出さうとするとずる／＼と這つて指の尖へ

吸ついてぶらりと下つた其の放れた指の尖から真赤な美しい血が

垂々と出たから、吃驚して目の下へ指をつけてじつと見ると、

今折曲げた肱の処へつるりと垂懸つて居るのは同形をした、巾

が五分、丈が三寸ばかりの山海鼠。

呆氣に取れて見る／＼内に、下の方から縮みながら、ぶくぶく

と太つて行くのは生血をしたゝかに吸込む所為で、濁つた黒い滑

らかな肌はだに茶褐色ちやかつしよくの縞しまをもつた、痣胡瓜いぼきうりのやうな血ちを取とる

動物、此奴は蛭ぢやよ。

誰が目にも見違へるわけのものではないが、つぬけ 図抜あまて余おほり大いから
一寸は気がつかぬであつた、何の畠なんはたけでも、甚どんなり麼履歴れきのある沼ぬまで
も、此位な蛭はあらうとは思はれぬ。

肱をばさりと振たけれども、よく喰くひこ込んだと見えてなかなか放
れさうにしないから不気味ながら手で抓つまんで引切ると、ぶつりと
いつてやうく取れる暫時も耐つたものではない、突とつぜん然取つ
て大地へ叩きつけると、これほどの奴等やつらが何万なんまんとなく巢すをくつ
て我ものにして居やうといふ処ところ、予かねて其の用意よういはして居ると思は
れるばかり、日ひのあたらぬ森もりの中の土は柔ない、潰つぶれさうにもない
のぢや。

と最早もはや領えりのあたりがむづ／＼して来たき、平手ひらてで扱こいて見みると横よ
こなで撫ひるに蛭せなの背せなをぬる／＼とすべるといふ、やあ、乳ちの下したへ潜ひそんで
おびあひだ帯おびの間あひだにも一疋びき、蒼あをくなつてそツと見みると肩かたの上うへにも一筋すぢ。
おも思おもはず飛とび上あがつて総そうしん身ふるを震ふるひながら此この大枝おほえだの下したを一散さんに
はしかけぬけて、走はしりながら先心まづこころ、覚おぼえの奴やつだけは夢中むちうでもぎ取とつた。
なに何なににしても恐おそろしい今いまの枝えだには蛭ひるが生なつて居ゐるのであらうと余あまりの
こと事ことに思おもつて振返ふりかへると、見返みかへつた樹きの何なんの枝えだか知しらず矢張やっぱ幾いくツと
いふいふこともない蛭ひるの皮かはぢや。
おもこれはと思おもふ、右みぎも、左ひだりも、前まへの枝えだも、何なんの事ことはないまるで充いッぱ
い満い。
わし私わしは思おもはず恐きようふ怖こゑの声こゑを立て、叫さけんだすると何なんと？
このとき此この時ときは目め

に見えて、上からぼたり／＼と真黒な瘠せた筋の入つた雨が体へ降かゝつて来たではないか。

草鞋を穿いた足の甲へも落た上へ又累り、並んだ傍へ又附着いて爪先も分らなくなつた、然うして生きてると思ふだけ脈を打つて血を吸ふやうな。思ひなしか一ツ一ツ伸縮をするやうなのを見るから気が遠くなつて、其時不思議な考が起きた。

此の恐い山蛭は神代の古から此処に屯をして居て人の来るのを待ちつけて、永い久しい間に何の位何斛かの血を吸ふと、其処でこの虫の望が叶ふ其時はありつたけの蛭が不残吸つたゞけの人間の血を吐出すと、其がために土がとけて山一ツ一面に血と泥との大沼にかはるであらう、其と同時に此処に日の光を

さへぎ ひる 遮つて昼もなほ暗い 大木が 切々、々に一ツ一ツ蛭になつて了う
 のに相違ないと、いや、全くの事で。」

第九

「凡そ人間が滅びるのは、地球の薄皮が破れて空から火が降
 るのでもなければ、大海が押被さるのでもない飛驒国の樹
 はやし ひる 林が蛭になるのが最初で、しまいには皆血と泥の中に筋の黒
 むし およ い虫が泳ぐ、其が代がはりの世界であらうと、ぼんやり。
 こなるほど此の森も 入口では何の事もなかつたのに、中へ来る
 このとほ と此通り、もつと奥深く進んだら早や不残立樹の根の方か

ら朽ちて山蛭になつて居やう、助かるまい、此処で取殺される因縁らしい、取留めのない考が浮んだのも人が知死期に近いたからだと弗と気が着いた。

何の道死ぬるものなら一足でも前へ進んで、世間の者が夢にも知らぬ血と泥の大沼の片端でも見て置かうと、然う覚悟が極つては気味の悪いも何もあつたものぢやない、体中珠数生になつたのを手当次第に掻い除け筆り棄て、抜き取りなどして、手を挙げ足を踏んで、宛で躍り狂ふ形で歩行出した。

はじめの内は一廻も太つたやうに思はれて痒さが耐らなかつたが、しまひにはげつそり瘦せたど、感じられてづきづき痛んでならぬ、其上を用捨なく歩行く内にも入交りに襲ひをつた。

既に目も眩くらんで倒たふれさうになると、禍わざわひは此この辺へんが絶ぜつ頂ちやうであつ
 たと見みえて、隧トンネル道ぬを抜ぬけたやうに遙はるかに一輪りんのかすれた月つきを拝おがん
 だのは蛭ひるの林はやしの出口でくちなので。

いや蒼あを空そらの下したへ出でた時ときには、何なんのことも忘わすれて、碎くだける、微み
 塵ぢんになれと横よこなぐりに体からだを山路やまぢへ打うち倒たふした。それだからもう砂じ

利やりでも針はりでもあれと地つちへこすりつけて、十と余あまりも蛭ひるの死骸しがいを引ひッ
 りかへした上うへから、五けん六か間か向むふへ飛とんで身み顫ふるをして突つ立たつた。

人を馬鹿ばかにして居ゐるではありませんか。あたりの山やまでは処ところ／

茅ひぐらし蝮し殿どの、血ちと泥どろの大沼おほぬまにならうといふ森もりを控ひかへて鳴ないて

居ゐる、日ひは斜ななめ、谷たに底そこはもう暗くらい。

先まづこれならば狼おほかみの餌食えじきになつても其それは一思おもひに死しなれるからと、

みち ちやうど
 路は丁度だら／＼下なり、小僧さん、調子はづれに竹の杖を
 肩にかついで、すたこら遁げたわ。

これで蛭に悩まされて痛いのか、痒いのか、それとも擦つたい
 のか得もいはれぬ苦しみさへなかつたら、嬉しさに独り飛驒山越
 の間道で、御経に節をつけて外道踊をやつたであらう一
 寸清心丹でも嚙碎いて疵口へつけたら何うだと、大分世
 の中の事に気がついて来たわ。捻つても確に活返つたのぢやが、
 夫にしても富山の薬売は何うしたらう、那の様子では疾に血
 になつて泥沼に。皮ばかりの死骸は森の中の暗い処、おまけに
 意地の汚い下司な動物が骨までしやぶらうと何百といふ数
 でのしかゝつて居た日には、酢をぶちまけても分る氣遣はある

まい。

恚かう思おもつて居ゐる間あひだ、件くだんのだら／＼坂かは大だい分ぶん長ながかつた。
 其それをお下きり切きると流ながれが聞きえて、飛とんだ処ところに長ながさ一けん間けんばかりの土ど橋ばしが

かゝつて居ゐる。

はそや其その谷たにかは川おとの音きを聞きくと我わが身みで持もてああまひる余ひるす蛭すひの吸す殻がらを真まつさ
 逆かさに投なげ込こんで、水みづに浸ひたしたら嘸さぞい可こ心ち地ちでああらうと思おもふ位くらゐ、何なんの
 渡わたりかかけて壊こはれたら夫それなりけり。

危あぶいとも思おもはずにずつと懸かる、少すこしぐら／＼ととしたたが難なんなく
 越こした。向むかふから又また坂さかぢや、今こんど度は上のぼりさ、御ご苦く勞らう千せん万ばん。」「

第十

「到底とても此この疲つかれやうでは、坂さかを上のぼるわけには行ゆくまいと思おもつたが、ふと前途ゆくてに、ヒイ、ンと馬うまの嘶いなくのが訝こだまして聞きこえた。

馬士まごが戻もどるのか小荷駄こにだが通とほるか、今朝けさ一人ひとりの百ひやく姓しやうに別わかれて

から時ときの経たつたは僅わづかぢやが、三年ねんも五年ねんも同一おんなじものをいふ人間にんげん

とは中なかを隔へだてた。馬うまが居ゐるやうでは左とも右かくも人里ひとざとに縁えんがあると、

之これがために氣きが勇いさんで、えゝやつと今いま一揉もみ。

一軒けんの山家やまがの前まへへ来たきたのには、然さまで難儀なんぎは感かんじなかつた、夏なつ

のことで戸障子としやうじの締しまりもせず、殊ことに一軒家けんや、あけ開ひらいたなり門もんと

いふでもない、突然いきなり破やぶれ椽えんになつて男をとこが一人ひとり、私わしはもう何なんの見み

境さかひもなく、(頼たのみます、頼たのみます、)といふさへ助たすけを呼よぶやう

な調子で、取継らぬばかりにした。

(御免なさいまし、) といったがものもいはない、首筋をぐつたりと、耳を肩で塞ぐほど顔を横にしたまゝ小児らしい、意味のない、然もぼつちりした目で、ぢろ／＼と、門に立つたものを見つめる、其の瞳を動かすさい、おつくうらしい、気の抜けた身の持ちかた。裾短かで袖は肱より少い、糊気のある、ちやん／＼を着て、胸のあたりで紐で結へたが、一ツ身のものを着たやうに出で腹の太り肉、太鼓を張つたくらゐに、すべく／＼とふくれて然も出臍といふ奴、南瓜の蒂ほどな異形な者を、片手でいぢくりながら幽霊のつきで、片手を宙にぶらり。

足は忘れたか投出した、腰がなくなれば暖簾を立てたやうに畳まれ

さうな、年紀が其で居て二十二三、口をあんぐりやつた上唇
 で巻込めやう、鼻の低さ、出額。五分刈の伸びたのが前は鶏冠
 の如くになつて、額脚へ刎ねて耳に被つた、唾か、白痴か、こ
 れから蛙にならうとするやうな少年。私は驚いた、此方の生命
 に別条はないが、先方様の形相。いや、大別条。

(一寸お願ひ申します。)

それでも為方がないから又言葉をかけたが少しも通ぜず、ばた
 りといふと僅に首の位置をかへて今度は左の肩を枕にした、口の
 開いてること旧の如し。

恁云ふのは、悪くすると突然ふんづかまへて臍を捻りながら返
 事のかはりに嘗めやうも知れぬ。

わしは一足退つたがいかに深山だといつても是を一人で置くと
いふ法はあるまい、と足を爪立て、少し声高に、

(何方ぞ、御免なさい、) といつた。

背戸と思ふあたりで再び馬の嘶く声。

(何方、) と納戸の方でいつたのは女ぢやから、南無三宝、此の
白く首には鱗が生へて、体は床を這つて尾をずる／＼と引いて
出やうと、又退つた。

(お、御坊様、) と立頭はれたのは小造の美しい、声も清
しい、ものやさしい。

私は大息を吐いて、何にもいはず、

(はい。) と頭を下げましたよ。

婦人は膝をついて坐つたが、前へ伸上るやうにして黄昏に
 しよんぼり立つた私が姿を透かし見て、（何か用でござんすかい
 ）
 休めともいはずはじめから宿の常世は留主らしい、人を泊めな
 いと極めたものゝやうに見える。
 いひ後れては却つて出そびれて頼むにも頼まれぬ仕誼にもなる
 ことゝ、つかくと前へ出た。丁寧に腰を屈めて、
 （私は、山越で信州へ参ります者ですが旅籠のございます処
 までは未だ何の位ございませう。）「

第十一

「(貴方まだ八里余でございますよ。)

(其他に別に泊めてくれます家もないのでせうか。)

(其はございませぬ。)といひながら目たゝきもしないで清しい目で私の顔をつく／＼見て居た。

(いえもう何でございます、実は此先一町行け、然うすれば上段の室に寝かして一晩扇いで居て其で功德のためにする家が
あると承りましても、全くの処一足も歩行けますものではございませぬ、何処の物置でも馬小屋の隅でも宜いのでございますから
後生でございます。)と前刻馬の嘶いたのは此家より外にはな
いと思つたから言つた。

婦人は暫く考へて居たが、弗と傍を向いて布の袋を取つて、膝
 のあたりに置いた桶の中へざら／＼と一巾、水を溢すやうにあけ
 て縁をおさへて、手で搦つて俯向いて見たが、

(あゝ、お泊め申しましたやう、丁度炊いてあげますほどお米も
 ございますから、其に夏のことで、山家は冷えましても夜のもの
 に御不自由もござんすまい。さあ、左も右もあなたお上り遊ばし
 て。)

といふと言葉の切れぬ先にどつかり腰を落した。婦人は衝と身を
 起して立つて来て、

(御坊様、それでござんすが一寸お断り申して置かねばなりません。
)

判然いはれたので私はびく／＼もので、

(唯、はい。)

(否、別のことぢやござんせぬが、私は癖として都の話みやこはなしを聞くのが病やまひでございます、口に蓋くちふたをしておいでなさいまして無理むりやりに聞きかうといたしますが、あなた忘わすれても其時そのとき聞きかして下くださいますな、可ようござんすかい、私は無理むりにお尋たづね申まをします、あなたは何どうしてもお話はなしなさいませぬ、其それを是非ぜひにと申まをしましても断たつて有おツしや仰おほしらないやうに屹きツと念ねんを入れて置おきますよ。)

と仔細しさいありげなことをいつた。

山やまの高たかさも谷たにの深ふかさも底そこの知しれない一軒家けんやの婦人をんなの言葉ことばとは思おもふたが、保たもつにむづかしい戒かいでもなし、私わしは唯ただ頷うなづくばかり。

（唯、宜しうございます、何事も仰有りつけは背きますまい

。）
 婦人は言下に打解けて、

（さあく汚うございますが早く此方へ、お寛ぎなさいまし、然うしてお洗足を上げませうかえ。）

（いえ、其には及びませぬ、雑巾をお貸し下さいまし。あゝ、それからもし其のお雑巾次手にぶツぷりお絞んなすつて下さると助ります、途中で大変な目に逢ひましたので、一ツ背中を拭かうと存じますいほど気味が悪うございますので、一ツ背中を拭かうと存じます）
 が恐入りますな。）

（然う、汗におなりなさいました、嘸ぞまあ、お暑うござんした

でせう、お待ちなさいまし、旅籠へお着き遊ばして湯にお入りな
 さいますのが、旅するお方には何より御馳走だと申しますね、湯
 どころか、お茶さへ碌におもてなしもいたされませんが、那の、
 此の裏の崖を下りますと、綺麗な流がございましてから一層其へ行
 らつしやツてお流しが宜うございませう、)

聞いただけでも飛でも行きたい。

(え、其は何より結構でございませう。)

(さあ、其では御案内申ませう、どれ、丁度私も米を磨ぎ
 に参ります。)と件の桶を小脇に抱へて、椽側から、藁草履
 を穿いて出たが、屈んで板椽の下を覗いて、引出したのは一足
 の古下駄で、かちりと合はして埃を払いて揃へて呉れた。

(お穿はきなさいまし、草鞋わらじは此処こゝにお置おきなすつて、)

私わしは手てをあげて一礼れいして、

(恐おそれい入まりませぬ、これは何どうも、)

(お泊とめ申ますと成なりましたら、あの、他た生しやうの縁えんとやらでござんす、あなた御遠慮ごゑんりよを遊あそばしますなよ。) 先まづ恐おそろしく調子てうしが可いいぢやて。」

第十二

「(さあ、私わたしに跟ついて此方こちらへ、) と件くだんの米磨桶こめとぎをけを引抱ひつかいへて手て拭ぬぐひを細ほそい帯おびに挟はさんで立たつた。

髪は房りとするのを束ねてな、櫛をはさんで笄で留めて居る、其の姿の佳さといふてはなかつた。

私も手早く草鞋を解いたから、早速古下駄を頂戴して、椽から立つ時一寸見ると、それ例の白痴殿ぢや。

同じく私が方をぢろりと見たつけよ、舌不足が饒舌るやうな、愚にもつかぬ声を出して、

(姉や、こえ、こえ。)といひながら、気だるさうに手を持ち上げて其の蓬々と生へた天窓を撫でた。

(坊さま、坊さま?)

すると婦人が、下ぶくれな顔にえくぼを刻んで、三ツばかりはきくと続けて頷いた。

少年せうねんはうむといつたが、ぐたりとして又臍またそをくりくく。

私は余あまり氣きの毒どくさに顔かほも上あげられないで密そつと盗ぬすむやうにして見みると、婦人をんなは何事なにごとも別べつに氣きに懸かけては居をらぬ様子やうす、其そのまゝ後あとへ跟ついて出でやうとする時とき、紫陽花あぢさいの花はなの蔭かげからぬいと出でた一名めいの親仁おやぢがある。

背戸せどから廻まはつて来きたらしい、草鞋わらじを穿はいたなりで、胴乱どうらんの根ね付つけを紐ひも長ながにぶらりと提さげ、脚煙管くはへぎせるをしながら並ならんで立停たちとまつた。
 (和尚様おしやうさまおいでなさい。)

婦人をんなは其方そなたを振向ふりむいて、

(おぢ様何さんどうでござんした。)

(然さればさの、頓馬とんまで間まの抜ぬけたといふのは那あのことかい。根ねツ

から早はや狐きつねでなければ乗のせ得えさうにもない奴やつぢやが、其そ処こはおら
 が口くちぢや、うまく仲なかうど人ひとして、二月つきや三月つきはお嬢ぢやうさま様さまが御ご不ふ自じ
 由じよのねえやうに、翌あす日はものにして沢山うんと此こゝ処こへ担かつぎ込こみます。）

（お頼たのみ申まをしますよ。）

（承しやうち知しやうち、承しやうち知しやうち、おゝ、嬢ぢやうさま様さま何どこ処こさ行ゆかつしやる。）

（崖がけの水みづまで一ちよ寸いと。）

（若わかい坊ぼうさま様さま連つれて川かはへ落おつこちさつさるな。おら此こゝ処こに眼がん張ばつ
 て待まつ居とるに、）と横よこ様さまに椽えんにのさり。

（貴あなた僧そう、あんなことを申まをしますよ。）と顔かほを見みて微ほ笑ゑんだ。

（一人ひとりで参まゐりませう、）と傍わきへ退のくと親おやぢ仁ぢは吃くつ々と笑わらつて、

（はゝゝゝ、さあ早はやくいつてござらつせえ。）

(をぢ様、今日はお前、珍らしいお客がお二人ござんした、慥ふ云ふ時はあとから又見えやうも知れませんが、次郎さんばかりでは来た者が弱んなさう、私が帰るまで其処に休んで居てをくれでないか。)

(可いもの。)といひかけて親仁は少年の傍へにぢり寄つて、鉄挺を見たやうな拳で、脊中をどんとくらはした、白痴の腹は

だぶりとして、べそをかくやうな口つきで、にやりと笑ふ。

私は慥気として面を背けたが婦人は何気ない体であつた。

親仁は大口を開いて、

(留主におらが此の亭主を盗むぞよ。)

(はい、ならば手柄でござんす、さあ、貴僧参りませうか。)

背後うしろから親仁おやぢが見るやうに思つたが、導みちびかるゝまゝに壁かべについで、彼の紫陽花あぢさいのある方ほうではない。

やがて脊戸せどと思ふ処おもで左ひだりに馬小屋うまごやを見た、ことゝといふ物音ものおとは羽目はめを蹴けるのであらう、もう其辺そのへんから薄うすぐら暗くくなつて来る。

(貴僧あなた、こゝから下をりるのでございます、迂すべりはいたしませぬが道みちが酷ひどうございますからお静しづかに、)といふ。」

第十三

「其処そこから下おりるのだと思おもはれる、松まつの木きの細ほそくツて度外どはづれに背せいの高たかいひよろゝした凡およそ五六間けんへ上へまでは小枝こえだ一ツもないのがあ

る。其そのなか中を潜くゞつたが仰あふぐと梢こずえに出て白しろい、月つきの形かたちは此ここ処こでも別べつにかはりは無なかつた、浮うきよ世は何ど処こにあるか十三夜じふさんやで。

先さきへ立たつた婦をんな人の姿すがたが目めさきを放はなれたから、松まつの幹みきに掴つかまつて覗のぞくと、ついで下したに居あた。

仰あふむ向むいて、

(急きふに低ひくくなりますから気きをつけて。こりや貴あなた僧そうには足あし駄だでは無む理りでございりましたか不知しら、宜よろしくば草履ざうりとお取交とりかへ申まをしませう。)

立たち後おれたのを歩行あるきな悩なやんだと察さつした様子やうす、何なにが扱さ転てげ落おちても早はやく行いつて蛭ひるの垢あかを落おしたさ。

(何なに、いけませんければ跣はだし足あしになります分ぶんのこと、何卒どうぞお構かまひなく、嬢ぢやうさま様に御心配ごしんぱいをかけては済すみません。)

(あれ、嬢様ですつて、)と稍調子を高めて、艶麗に笑つた。

(唯、唯今あの爺様が、然やう申しましたやうに存じますが、夫人でございますか。)

(何にしても貴僧には叔母さん位な年紀ですよ。まあ、お早くいらつしやい、草履も可うござんすけれど、刺がさゝりますと不可ません、それにじくじく湿れて居てお気味が悪うございませうから)と向ふ向でいひながら衣服の片褻をぐいとあげた。真白なのが暗まぎれ、歩行くと霜が消えて行くやうな。

ずんくずんくと道を下りる、傍の叢から、のさくと出たのは臺で。

(あれ、き味がわる悪いよ。)といふと婦人をんなは背後うしろへ高たか々々と踵かかとを上げて向むかふへ飛とんだ。

(お客きやくさま様が被あ在らしやるではないかね、人ひとの足あしになんか搦からまつて贅ぜいたく沢たくぢやあないか、お前まへ達だちは虫むしを吸すつて居ゐれば沢たく山さんだよ。

貴僧あなたずん／＼入いらつしやいましたな、何どうもしはしません。恁かうい云い

ふ処ところですからあんなものまで人ひと懐なつかうございます、厭いやぢやない

かね、お前まへ達だちと友とも達だちを見みたやうで可はづ愧かしい、あれ可いけません

よ。)

墓ひきはのさ／＼と又また草さを分わけて入はいつた、婦人をんなはむかふへずいと。

(さあ此この上うへへ乗のるんです、土つちが柔やはらかで壊くへますから地ぢ面めんは歩ある行る

かれません。)

いかにも大木の僵れたのが草がぐれに其の幹をあらはして居る、乗ると足駄穿で差支へがない、丸木だけれども可恐しく太いので、尤もこれを渡り果てると忽ち流の音が耳に激した、それまでには余程の間。

仰いで見ると松の樹はもう影も見えない、十三夜の月はずつと低うなつたが、今下りた山の頂に半ばかりつて、手が届きさうにあざやかだけれども、高さは凡そ計り知られぬ。

(貴僧、此方へ。)

といった、婦人はもう一息、目の下に立つて待つて居た。

其処は早や一面の岩で、岩の上へ谷川の水がかゝつて此処によどみを造つて居る、川巾は一間ばかり、水に望めば音は然まで

にもないが、美しさは玉を解いて流したやう、却つて遠くの方で
 凄じく岩に碎ける響がする。

向ふ岸は又一坐の山の裾で、頂の方は真暗だが、山の端から
 其山腹を射る月の光に照らし出された辺からは大石小石、榮
 螺のやうなの、六尺角に切出したの、劍のやうなのやら鞆の
 形をしたのやら、目の届く限り不残岩で、次第に大きく水に浸つ
 たのは唯小山のやう。」

第十四

「(可塩梅に今日は水がふへて居りますから、中に入りません

でも此上このうへで可ようございます。と甲かうを浸ひたして爪つま先さきを屈かめながら、雪ゆきのやうな素足すあしで石いしの盤ばんの上うへに立たつて居ゐた。

自分じぶん達たちが立たつた側がはは、却かへつて此方こなたの山やまの裾すそが水みづに迫せまつて、丁ちやうどきりあなかたちの形かたちになつて、其処そこへ此この石いしを箝はめたやうな詔あつらへ。川かは

上みも下流かりうも見えぬが、向むかふの彼かの岩山いはやま、九十九折つづらのやうな形かたち、

流ながれは五尺しやく、三尺しやく、一間けんばかりづゝ上流じやうりうの方が段々だん／＼と遠く、

飛とび々／＼に岩いはをかゞつたやうに隠見いんけんして、いづれも月光げつくわうを

浴びた、銀ぎんの鎧よろひの姿すがた、目まのあたり近いちかのはゆるぎ糸いとを捌さばくが如ごとく

真白まっしろに翻ひるつて。

(結構けつこうな流ながれでございますな。)

(はい、此この水みづは源みなもとが瀧たきでございます、此この山やまを旅たびするお方かたは皆みな

おほかぜ
大風のやうな音を何処かで聞きます。貴僧は此方へ被入つしや
る道でお心着きはなさいませんかい。)

然ればこそ山蛭の大藪へ入らうといふ少し前から其の音を。
(彼は林へ風の当るのではございませぬので?)

(否、誰でも然う申します那の森から三里ばかり傍道へ入りま
した処に大瀧があるのでございませぬ、其れはく日本一ださ

うですが路が峻しうござんすので、十人に一人参つたものはござ
いません。其の瀧が荒れましたと申しまして丁度今から十三年
前、可恐しい洪水がございました、恁麼高いところまで川の底
になりましてね、麓の村も山の家も残らず流れて了りました。此
の上の洞もはじめは二十軒ばかりあつたのでござんす、此の流れ

も其そのとき時から出来できました、御覽ごらんなさいましな、此この通とほり皆みな石いしが流なが

れたのでございますよ。)

婦人をんなは何いつ時つかもう米こめを精しらげ果はて、衣紋えもんの乱みだれた、乳ちの端はしもほ
のみ見みゆる、膨ふくらかな胸むねを反そらして立たつた、鼻高はなたかく口くちを結むすんで目めを
恍うつ惚とりと上うへを向むいて頂いたゞきあふを仰あがいだが、月つきはなほ半腹はんぷくの其その累るゑ々
たる巖いはほを照てらすばかり。

(今いまでも恚かうやつて見みますと恐こはいやうでございます。) と屈かゞんで
二うでの腕とこの処あを洗あらつて居あると。

(あれ、貴僧あなた、那樣そんなぎやうぎ行儀ぎの可いいことをして被あ在らしつては召めしが
濡ぬれます、氣味きみが悪わるうございますよ、すつぱり裸はだか体かになつてお洗あら
ひなさいまし、私わたしが流ながして上あげませう。)

(否、いへ)

(否ぢやあござんせぬ、それ、それ、お法衣ころもの袖そでに浸ひたるではありませんか、)といふと突然いきなり背後うしろから帯おびに手てをかけて、身悶みもだえをして縮ちぢむのを、邪慳じやけんらしくすつぱり脱ぬいで取とつた。

私は師匠わしが嚴ししやうかつたし、経きやうを讀よむ身体からだぢや、肌はださへ脱ぬいだことはついぞ覺おぼえぬ。然しかも婦人をんなの前まへ、蝸まひく牛つぶろが城しろを明あけ渡わたしたやうで、口くちを利きくさへ、況まして手足てあしのあがきも出で来きず背せ中なかを丸まるして、膝ひざを合あはせて、縮ちぢかまると、婦人をんなは脱ぬがした法衣ころもを傍かたはらの枝えだへふわりとかけた。

(お召めしは恚かうやつて置おきませう、さあお背せなを、あれさ、じつとして。お嬢ぢやうさま様おつしやと有おつしや仰くつて下くださいましたお礼れいに、叔母をばさんが世話せわ

を焼くのでござんす、お人の悪い、）といつて片袖を前歯で引上げ、

玉のやうな二の腕をあからさまに背中に乗せたが、熟と見て、

（まあ、）

（何うかいたしてをりますか。）

（痣のやうになつて一面に。）

（え、それでございます、酷い目に逢ひました。）

思ひ出して、ぞッ
「

第十五

「婦人は驚いた顔をして、

（それでは森の中で、大變でございますこと。旅をする人が、飛驒の山では蛭が降るといふのは彼処でござんす。貴僧は拔道を御存じないから正面に蛭の巢をお通りなさいましたのでございませよ。お生命も冥加な位、馬でも牛でも吸殺すのでございませもの。然し疼くやうにお痒いのでござんせうね。）

（唯今では最う痛みますばかりになりました。）

（それでは恁麼ものでござりましたは柔いお肌が擦剥けませう、）といふと手が綿のやうに障つた。

それから両方の肩から、背、横腹、臀、さら／＼水をかけてはさすつてくれる。

それがさ、骨ほねに通とほつて冷つめたいかといふと然さうではなかつた。暑あつい時じぶん分ぶんぢやが、理りくつ屈くつをいふと恚かうではあるまい、私わしの血ちが湧わいたせいか、婦をんな人の温ぬくみ気きか、手てで洗あらつてくれる水みづが可い工く合あひに身みに染しみる、尤もツとたち質ちの佳い水みづは柔みやぢやさうな。

其その心こゝち地ちの得えもいはれなさで、眠ねむけ気がさしたでもあるまいが、うとくくする様やう子すで、疵きずの痛いたみがなくなつて気きが遠とほくなつてひたと附くつついて居ゐる婦をんな人の身からだ体たで、私わしは花はなびらの中なかへ包つまれたやうな工く合あひ。

山やま家がの者ものには肖にあ合あはぬ、都みやこにも希まれな器きり量やうはいふに及およばぬが弱よ々わしさうな風ふう采さいぢや、背せを流ながす内うちにもはツくと内ない証しようで呼い吸きがはづむから、最もう断ことらうくと思おもひながら、例れいの恍うつ惚とりで、

気はつきながら洗はした。

其上、山の気か、女の香か、ほんのりと佳い薫がする、私は

背後でつく息ぢやらうと思つた。」

上人は一寸句切つて、

「いや、お前様お手近ぢや、其の明を掻立つて貰ひたい、暗いと

怪しからぬ話ぢや、此処等から一番野面で遣つけやう。」

枕を並べた上人の姿も臙げに明は暗くなつて居た、早速

燈心を明くすると、上人は微笑みながら続けたのである。

「さあ、然うやつて何時の間にも無しに、恚う、其の不

思議な、結構な薫のする暖い花の中へ、柔かに包まれて、足、

腰、手、肩、頸から次第に、天窓まで一面に被つたから吃驚、

石に尻持を搗いて、足を水の中に投出したから落ちたと思ふ途端に、女の手が脊後から肩越に胸をおさへたので確りつかまつた。

(あなた、お傍に居て汗臭うはござんせぬかい飛だ暑がりなんでございますから、恚うやつて居りましても恚麼でございますよ。) といふ胸にある手を取つたのを、慌て、放して棒のやうに立つた。(失礼、)

(いゝえ誰も見て居りはしませんよ。)と澄まして言ふ、婦人も何時の間にか衣服を脱いで全身を練絹のやうに露はして居たのぢや。

なんおどろ
何と驚くまいことか。

(慙こんなに太ふとつて居をりますから、最もうお可はづか愧かしいほど暑あついのでござ
います、今いま時ときは毎まい日にち二ど度ども三ど度ども来きては慙かうやつて汗あせを流ながし
ます、此この水みづがございませんかつたら何どういたしませう、貴あなた僧ぞう、
お手て拭ぬぐひ。)といつて絞しぼつたのを寄よ越こした。

(其それでおみ足あしをお拭ふきなさいまし。)

何時いつの間まにか、体からだはちやんと拭ふいてあつた、お話はなし申まをすも恐おそれ
多おほいか、はゝはゝはゝ。」「

第十六

「なるほど見みた處ところ、衣きもの服を着きた時ときの姿すがたとは違ちがふて肉しつきの豊ゆたかな、

ふつくりとした皮膚。^{はだへ}

(先刻小屋へ入つて世話をしましたので、ぬら／＼した馬の鼻^{うま はない}息が体中へかゝつて気味が悪うござんす。丁度可うございま

すから私も体を拭きませう、)

と姉 弟が内端話をするやうな調子。手をあげて黒髪をお

さへながら腋の下を手拭でぐいと拭き、あとを両手で絞りな

がら立つた姿、唯これ雪のやうなのを憚る霊水で清めた、憚云

ふ女の汗は薄紅になつて流れやう。

一寸／＼と櫛を入れて、

(まあ、女がこんなお転婆をいたしましたして、川へ落こちたら何う

しませう、川下へ流れて出ましたら、村里の者が何といつて

見ませうね。）

（白桃の花だと思ひます。）と弗と心着いて何の気もなしにいふと、顔が合ふた。

すると然も嬉しさうに莞爾して其時だけは初々しう年紀も七ツ八ツ若やぐばかり、処女の羞を含んで下を向いた。

私は其まゝ目を外らしたが、其の一段の婦人の姿が月を浴びて、薄い煙に包まれながら向ふ岸の※に濡れて黒い、滑かな、大なる蒼味を帯びて透過つて映るやうに見えた。

するとね、夜目で判然とは目に入らなんだが地体何でも洞穴があると思える。ひらくと、此方からもひらくと、ものゝ鳥ほどはあらうといふ大蝙蝠が目を遮つた。

(あれ、不可いけないよ、お客きやくさま様があるぢやないかね。)

不意ふいを打うたれたやうに叫さけんで身み悶もだえをしたのは婦人をんな。

(何どうかなさいましたか、) 最もうちやんと法衣ころもを着きたから気丈きちやう

夫ぶに尋たづねる。

(否いゝえ、)

といつたばかりで極きまりが悪わるさうに、くるりと後うしろ向むきになつた。

其そのとき時こいぬ小犬こいぬほどな鼠ねづ色みいろの小坊主こぼうずが、ちよこくとやつて来き

て、啊あなや呀おもと思おもふと、崖がけから横よこに宙ちゆうをひよいと、背後うしろから婦人をんなの背せ

中なかへびつたり。

裸体はだかの立たち姿すがたは腰こしから消きえたやうになつて、抱だきついたものが

ある。

(畜生お客様が見えないかい。)

と声に怒を帯びたが、

(お前達は生意気だよ、)と激しくいひさま、腋の下から覗かうとした件の動物の天窓を振り返りさまにくらはしたで。

キツ、といふて奇声を放つた、件の小坊主は其まゝ後飛びに又宙を飛んで、今まで法衣をかけて置いた枝の尖へ長い手で釣し下つたと思ふと、くるりと釣瓶覆に上へ乗つて、其なりさらくと木登をしたのは、何と猿ぢやあるまいか。

枝から枝を伝ふと見えて、見上げるやうに高い木の、聴て梢まで、かさくがさり。

まばらに葉の中を透かして月は山の端を放れた、其の梢のあた

り。

婦人をんなはものに拗すねたやう、今の悪戯いたづら、いや、毎々まいく、墓ひきと蝠か蝠はほりとお猿さるで三度どぢや。

其その悪戯いたづらに多く機嫌きげんを損そこねた形かたち、あまり子供こどもがはしやぎ過ぎすると、若い母様わか おふくろには得えてある図づぢや、
本ほん当たうに怒おこり出だす。

といつた風情ふぜいで面倒臭めんたうくささうに衣服きものを着きて居ゐたから、私わしは何なんにも問とはずに少ちいさくなつて黙だまつて控ひかへた。」

第十七

「優しいなかに強みのある、気軽に見えても何処にか落着のあ
 る、馴々しくして犯し易からぬ品の可い、如何なることにもいざ
 となれば驚くに足らぬといふ身に応のあるといつたやうな風の婦
 人、慥く嬌暎を発しては屹度可いことはあるまい、今此の婦
 人に邪慳にされては木から落ちた猿同然ぢやと、おつかなび
 つくりで、おづく控へて居たが、いや案ずるより産が安い。
 (貴僧、嘸をかしかつたでござんせうね、)と自分でも思ひ出し
 たやうに快く微笑みながら、

(為やうがないのでございますよ。)

以前と変らず心安くなつた、帯も早や締めたので、

(其では家へ帰りませう。)と米磨桶を小脇にして、草履を引

かけて衝つと崖がけへ上のぼつた。

(お危あぶうござんすから、)

(否いえ、もう大分勝手だいぶんかつてが分わかつて居をります。)

づつと心こころえ得つもりた意いぢやつたが、扱さて上ある時とき見みると思おもひの外ほか上かまで
は大層たいそう高い。

やがやがまたれいまたれいの木きの丸太まるたを渡わたるのぢやが、前刻さつきもいつた通草とほりさのなか
に横倒よこたふれになつて居ゐる、木地きぢが恚かう丁度ちやうど鱗ろこのやうで譬たとへにも能よ
くいふが松まつの木きは蝮うわに似にて居ゐるで。

殊ことに崖がけを、上うへの方ほうへ、可塩梅い、あんばいに畝うねつた様子やうすが、飛とんだものに持も
つて来こいなり、凡およそ此この位くらゐな胴中どうなかの長虫ながむしがと思おもふと、頭かしらと尾を
を草くさに隠かくして月つきあかりに歴然ありとそれ。

やまみちるときおも山路の時を思ひ出すと我ながら足が窘む。

をんなは親切に後を氣遣ふては氣を着けてくれる。

(其をお渡りなさいます時、下を見てはなりません 丁度中途
よつぽだに深いのでございませうから、目が廻と悪うござんす。)

(はい。)

愚図々々しては居られぬから、我身を笑ひつけて、先づ乗つた。
引かゝるやう、刻が入てあるのぢやから、氣さい確なら足駄でも
歩行かれる。

其がさ、一件ぢやから耐らぬて、乗ると恚うぐらくして柔か
にずるくと這ひさうぢやから、わつといふと引跨いで腰をど
さり。

(あゝ、意気地はございませぬえ。足駄では無理でございませう、是とお穿き換へなさいまし、あれさ、ちやんといふことを肯くんですよ。)

私はその前刻から何となく此婦人に畏敬の念が生じて善か悪か、何の道命令されるやうに心得たから、いはるゝままに草履を穿いた。

するとお聞きなさい、婦女は足駄を穿きながら手を取つてくれます。

たちまみがる
 忍ち身が軽くなつたやうに覚えて、
 訊なく後に従ふて、ひよい
 と那の孤家の背戸の端へ出た。

出会頭に声を懸けたものがある。

(やあ、大分手間が取れると思つたに、御坊様旧の体で帰らつしやつたの、)

(何をいふんだね、小父様家の番は何うおしだ。)

(もう可い時分ぢや、又私も余り遅うなつては道が困るで、そろ

／＼青を引出して支度して置かうと思ふてよ。)

(其はお待遠でござんした。)

(何さ行つて見さつしやい御亭主は無事ぢや、いやなかなか私

が手には口説落されなんだ、はゝゝゝはゝゝゝ。)と意味もないこ

とを大笑して、親仁は厩の方へてく／＼と行つた。

白痴はおなじ処に猶形を存して居る、海月も日にあたらねば解

けぬと見える。」

第十八

「ヒイ、ン！ 叱、どうどうどうと背戸を廻る蹄の音が椽へ響いて親仁は一頭の馬を門前へ引出した。

轡頭を取つて立ちはだかり、

（嬢様そんなら此儘で私参りやする、はい、御坊様に沢山山御馳走して上げなされ。）

婦人は炉縁に行燈を引附け、俯向いて鍋の下を焚して居たが振仰ぎ、鉄の火箸を持った手を膝に置いて、

（御苦労でござんす。）

(いんえ 御 懇 には及びましねえ。叱!)、と 荒繩の綱を引く。
あを あしげ はだかうま たくま たてがみうす おす
 青で蘆毛、裸馬で逞しいが、鬣の薄い牡ぢやわい。

そのつま 其馬がさ、私も別に馬は珍らしいもないが、
わし べつ うま めづ 白痴殿の背後に畏
てもちぶさた つて手持不沙汰ぢやから今引いて行かうとする時
いまひ 椽側へひらりと出て、

(其馬は何処へ。)

(お、 諏訪の湖の辺まで馬市へ出しやすのぢや、これから明
すは みづう あたり うまいち 朝御坊様が歩行かつしやる山路を越えて行きやす。)

(もし其へ乗つて今からお遁げ遊ばすお意ではないかい。)
それ の いま に あそ 婦人は慌だしく遮つて声を懸けた。
をんな あはた さへぎ こゑ

(いえ、 勿体ない、 修行の身が馬で足休めをしませうな
もつたい しゆぎやう 行の身が馬で足休めをしませうな)

ぞとは存じませぬ。()

(何でも人間を乗つけられさうな馬ぢやあござらぬ。御坊様はいのちびろひ命拾をなされたのぢやで、大人しうして嬢様の袖の中で、今夜は助けて貰はつしやい。然様ならちよつくら行つて参りますよ。)

(あい。)

(畜生、) といつたが馬は出ないわ。びくくくと蠢いて見えおほき はなツつら 面を此方へ捻ぢ向けて頻に私等が居る方を見る様子。 (どうくどう、畜生これあだけた獣ぢや、やい！)

右 左にして綱を引張つたが、脚から根をつけた如くにぬつくと立つて居てびくともせぬ。

親仁大に苛立つて、叩いたり、打つたり、馬の胴体について
 二三度ぐるぐると廻はつたが少しも歩かぬ。肩でぶツつかるやう
 にして横腹に体をあてた時、漸う前足を上げたばかり又四脚
 を突張り抜く。

(嬢様々々《く》)。

と親仁が喚くと、婦人は一寸立つて白い爪さきをちよろちよろ
 と真黒に煤けた太い柱を楯に取つて、馬の目の届かぬほどに小
 隠れた。

其内腰に挟んだ、煮染めたやうな、なへくの手拭を抜い
 て克明に刻んだ額の皺の汗を拭いて、親仁は之で可しといふ氣
 組、再び前へ廻つたが、旧に依つて貧乏動もしないので、綱

に両手をかけて足を揃へて反返るやうにして、うむと総身の
 力を入れた。途端に何うぢやい。

すさまじく嘶いて前足を両方中空へ翻したから、小な親仁は

仰向けに引くりかへつた、づどんどう、月夜に砂煙が※と立

つ。

白痴にも之は可笑かつたらう、此時ばかりぢや、真直に首

を据ゑて厚い唇をばくりと開けた、大粒な歯を露出して、那の

宙へ下げて居る手を風で煽るやうに、はらりく。

(世話が焼けることねえ、)

婦人は投げるやうにいつて草履を突かけて土間へついと出る。

(嬢様勘違ひさつしやるな、これはお前様ではないぞ、

なん
何でもはじめから其処そこな御坊様おぼうさまに目めをつけたつけよ、畜生俗ちくしやうぞ

縁くえんがあるだツペいわさ。)

ぞくえん おどろ
俗縁は驚おどろきたい。

すると婦人をんなが、

(貴僧あなたこゝへ入いらつしやる路みちで誰だれにかお逢あひなさりはしませんか

。)
「

第十九

「(はい、辻つぢの手前てまへで富山とやまの反魂丹はんこんたん売うりに逢あひましたが、一足あし
前さきに矢張やっばり此路のちへ入いりました。)

(あゝ、然う、)と会心の笑を洩らして婦人は蘆毛の方を見た、凡そ耐らなく可笑しいといった仿ない風采で。

極めて与し易う見えたので、

(もしや此家へ参りませなんだでございませうか。)

(否、存じません。)

私は口をつぐむと、婦人は、匙を投げて衣の塵を払ふて居る馬の前足の下に小さな親仁を見向いて、

(為様がないねえ、)といひながら、かなぐるやうにして、其の細帯を解きかけた、片端が土へ引かうとするのを、掻取つて一寸猶予ふ。

(あゝ、あゝ、)と濁つた声を出して白痴が件のひよろりとした

て手を差向けたので、婦人は解いたのを渡して遣ると、風呂敷を寛
 げたやうな、他愛のない、力のない、膝の上へわがねて宝物を
 守護するやうぢや。

婦人は衣紋を抱合はせ、乳の下でおさへながら静かに土間を出
 て馬の傍へつゝと寄つた。

私は唯呆氣に取られて見て居ると、爪立をして伸上り、手を
 しなやかに空ぎまにして、二三度鬣を撫でたが。

大な鼻頭の正面にすつくりと立つた。丈もすらくと急に高
 くなつたやうに見えた、婦人は目を据ゑ、口を結び、眉を開いて
 うっとり恍惚となつた有様、愛嬌も嬌態も、世話らしい打解けた風
 は頓に失せて、神か、魔かと思はれる。

そのときうらやまむかみねさいうぜんご
 其時裏の山、向ふの峯、左右前後にすくくとあるのが、一

ツ一ツ嘴を向け、頭を擡げて、此の一落の別天地、親仁を下手に控へ、馬に面してゐんだ月下の美女の姿を差覗くが如く、陰々として深山の気が籠つて来た。

生ぬるい風のやうな氣勢がすると思ふと、左の肩から片膚を脱いたが、右の手を脱して、前へ廻し、ふくらんだ胸のあたりで着て居た其の単衣を丸げて持ち、霞も絡はぬ姿になつた。

馬は背、腹の皮を弛めて汗もしとゞに流れんばかり、突張つた脚もなよよとして身震をしたが、鼻面を地につけて、一掴の白泡を吹出したと思ふと前足を折らうとする。

そのとき、あぎとしたて、片手で持つて居た単衣をふわり

と投なげて馬うまの目めを蔽おほふが否いなや、

うさぎをど

兎うさぎは躍をどつて、仰あふむ向けざまに身みを翻ひるがへ、妖えう氣きを籠こめて朦まう朧ろうとし

つき

た月つきあかりに、前まへ足あしの間に膚あひだが挟はつたと思おもふと、衣きぬを脱はづして搔か

いと

取りながら下腹したばらを衝つと潜くゞつて横よこに抜ぬけて出でた。

おやち さしこゝろえ

親おやち仁には差さ心得しこゝろえたものと見みえる、此この機きかけに手綱たづなを引ひいたか

うま

ら、馬うまはすたくくと健けん脚きやくを山路やまちに上あげた、しやん、しやんし

やん、しやんしやん、しやんしやん、——見みる間まに眼がん界かいを遠とほざ

かる。

をんな

婦をんな人は早はや衣服きものを引ひかけて

椽えん側がはへ入はいつて来きて、突いき然な帯おびを取とら

うとすると、白痴ばかは惜をしさうに押おへて放はなさず、手てを上あげて。婦をんな人

の胸むねを圧おさへやうとした。

邪慳じやけんにはらひ退のけて、屹きつと睨にらむで見みせると、其そのまゝがつくりと頭かうべたを垂たれた、総すべての光くわうけい景けいは行あんどう燈とうの火ひも幽かすかに幻まぼろしのやうに見みえたが、炉ろにくべた柴しばがひらくと炎ほさき先さきを立たてたので、婦人をんなは衝つと走はしつて入はいる。空そらの月つきのうらを行ゆくと思おもふあたり遙はるかに馬子まごうた唄きこが聞きこえたて。）」

第二十

「さて、其それから御飯ごはんの時ときぢや、膳ぜんには山家やまがの香かうの物もの、生姜はじかみの漬つけたのと、わかめを茹うでたの、塩漬しほづけの名なも知らぬ蕈きのこの味噌汁みそじる、いやなか〜人参にんじんと干瓢かんぺうどころではござらぬ。

品物は佗しいが、なか／＼の御手料理、餓えては居るし冥
 加至極なお給仕、盆を膝に構へて其上を肱をついて、頬を支
 えながら、嬉しさうに見て居たわ。

椽側えんがはに居た白痴あほうは誰も取合とりあはぬ徒つれ然／＼に堪たへられなくなつ
 たものか、ぐた／＼と膝行いざりだ出して、婦人をんなの傍そばへ其その便べん々／＼たる腹はら
 を持つて来たが、崩くづれたやうに胡座あぐらして、頻しきりに恚かう我が膳ぜんを視ながめ
 て、指ゆびをした。

(うゝ／＼、うゝ／＼。)

(何なんでございますね、あとでお食あがんなさい、お客きやく様さまぢやあゝ
 りませんか。)

白痴あほうは情なさけない顔かほをして口くちを曲ゆがめながら頭かぶりを掉ふつた。

(厭いや)？ 仕様しやうがありませんね、それぢや御ご一いつ所しよに召めしあがれ。

あなたあなたごめんごめん 貴僧かうむ御免ごめんを蒙かりますよ。()

私わしは思おもはず箸はしを置おいて、

(さあ何どうぞお構かまひなく、飛とんだ御雑作ござふさを、頂いたぎます。)

(否いえ、何なんの貴僧あなた。お前まいさん後程のちほどに私わたしと一いつ所しよにお食たべなされば

可いのに。困こまつた人ひとでございますよ。)とそらさぬ愛想あいさう、手早てばやく

同おなじ一いちやうな膳ぜんを拵こしらえてならべて出だした。

飯めしのつけやうも効かひ々／＼しい女房にようぼうぶり、然しかも何なんとなく奥おくゆ

床かしい、上じやう品ひんな、高家かうけの風ふうがある。

白痴あほうはどんよりした目めをあげて膳ぜんの上うへを睨ねめて居ゐたが、

(彼あれを、あゝ、彼あれ、彼あれ。)といつてきよろくと四辺あたりを睭みまはす。

をんな ちつみまも
婦人は熟と瞻つて、

(まあ、可ぢやないか。そんなものは何時でも食られます、今夜

はお客様がありますよ。)

(うむ、いや、いや。)と肩腹を揺つたが、ベそを搔いて泣出

しきう。

をんな こうは
婦人は困じ果てたらしい、傍のものゝ気の毒さ。

(嬢様、何か存じませんが、おつしやる通りになすつたが可

いではござりませんか。私にお気扱は却つて心苦しうご

ざります。)と慇懃にいふた。

をんな またも
婦人は又最う一度、

(厭かい、これでは悪いのかい。)

あほう なぎだ
 白痴が泣出しさうにすると、然も怨めしげに流盼に見ながら、
 こはれくになつた戸棚の中から、鉢に入つたのを取出して手早
 く白痴の膳につけた。

(はい、)と故とらしく、すねたやうにいつて笑顔造。

はてさて迷惑な、こりや目の前で黄色蛇の旨煮か、腹

籠の猿の蒸焼か、災難が軽うても、赤蛙の干物を大

口にしやぶるであらうと、潜と見て居ると、片手に腕を持ちな

がら掴出したのは老沢庵。

其もさ、刻んだのではないで、一本三ツ切にしたらうといふ

握 太なのを横 脚にしてやらかすのぢや。

婦人はよくくあしらひかねたか、盗むやうに私を見て颯と顔

を赤らめて初心らしい、然様な質ではあるまいに、羞かしげに
 膝なる手拭の端を口にあてた。

なるほど此の少年はこれであらう、身体は沢庵色にふとつ
 て居る。やがてわけもなく餌食を平らげて、湯ともいはず、ふつ
 くと太儀さうに呼吸を向ふへ吐くわき。

(何でございますか、私は胸に支へましたやうで、些少も欲しく
 ございせんから、又後程に頂きませう、)と婦人自分は箸
 も取らずに二ツの膳を片つけてな。」

第二十一

「頃刻しほらく 悄悄しよんぼり 乎しよ して居ゐたつけ。

（貴僧あなたぎぞ 嘸つかれ お疲労す、直すぐにお休やすませ申まをしませうか。）

（難ありがた 有ぞん う存ぞん じます、未ま だ些ちつ とも眠ねむ くはござりません、前さつ 刻せん 体をだ

洗あら ひましたので草くた 臥た びれもすつかり復なほ りました。）

（那あ の流なが れは其どん 麼ん 病まひ にでもよく利き きます、私わたし が苦く 勞らう をいたしまし

て骨ほね と皮かは ばかりに体からだ が朽か れましても半はん 日にち 彼あすこ 処こ につかつて居を りま

すと、水みづ 々く しくなるのでございますよ。尤もつと も那あ のこれから冬ふゆ に

なりまして山やま が宛まる 然で 氷こほ つて了しま ひ、川かは も崖がけ も不のこ 残ら 雪ゆき になりまして

も、貴僧あなた が行ぎやう ずず 水みづ を遊あそ ばした彼あすこ 処こ ばかりは水みづ が隠かく れません、然さ

うしていきりが立た ちます。

鉄てつ 砲ぱう 疵きづ のごご ざざ います猿さる だの、貴僧あなた、足あし を折を つた五ご 位ゐ 鷲さぎ、種いろ

々ゝな者ものが浴ゆあみに参まゐりますから其その足痕あしあとで崖がけの路みちが出来できます位くらゐ、屹きつと其それが利きいたのでございませう。

那樣そんなにございませんければ恚かうやつてお話をなすつて下くださいまし、淋さびしくつてなりません、本ほん当とにお可はづ愧かしうございませすが恚こん麼な山やまの中なかに引籠ひっこもつてをりますと、ものをいふことも忘わすれましたやうで、心こゝろ細ほそいのでございますよ。

貴僧あなた、それでもお眠ねむければ御遠慮ごゑんりよなさいますなえ。別べつにお寢ね室まと申まをしてもございませんが其その換かはり蚊かは一ツも居ゐませんよ、町ま方ちかたではね、上かみの洞ほらの者ものは、里さとへ泊とまりに来きた時とき、蚊帳かやを釣つつて寢ねかさうとすると、何どうして入はいるのか解わからないので、階子はしごを貸かせいと喚わめいたと申まをして嫩なぶるのでございます。

たくさぬさねあそ
沢山朝寝を遊ばしても鐘は聞えず、鶏も鳴きません、犬だつて

を居りませんからお心休うござんせう。

このひと
此人も生れ落ちると此山で育つたので、何にも存じません
代、気の可い人で些ともお心置はないのでござんす。

それでも風俗のかはつた方が被入しやいますと、大事にしてお
辞義をすることだけは知つてゞございりますが、未だ御挨拶をい
たしませんね。此頃は体がだるいと見えてお惰けさんになん
すつたよ、否、宛で愚なのではございませぬ、何でもちやんと心
得て居ります。

さあ、御坊様に御挨拶をなすつて下さい、まあ、お辞義をお
忘れかい。と親しげに身を寄せて、顔を差覗いて、いそぐ

していふと、白痴ばかはふらくくと両手りやうてをついて、ぜんまいが切れきたやうにがつくり一礼れい。

(はい、)といつて私も何か胸むねが迫せまつて頭つむりを下さげた。

其まゝ其の俯向うつむいた拍子ひやうしに筋すぢが抜ぬけたらしい、横よこに流ながれやうとするのを、婦人をんなは優やさしう扶たすけ起おこして、

(おゝ、よく為したのねえ、)

天晴あつぱれといひたさうな顔色かほつきで、

(貴僧あなた、申まをせば何なんでも出来できませうと思おもひますけれども、此この人ひとの

病やまひばかりはお医者いしやの手てでも那あの水みづでも復なほりませなんだ、両りやう足あし

が立たちませないのでございますから、何なにを覚おぼえさしましても役やくには

立たちません。其それに御覧ごらんなさいまし、お辞義じぎ一ひとツいたしますさい、

あの通大儀らしい。

ものを教へますと覚え、ますのに、嘸骨が折れて切なうござんせう、
 からだくる
 体を苦しませるだけだと存じて何も為せないので置きますから、段々、手を動かす働も、ものをいふことも忘れ、其でも
 ん／＼、て、はたらき
 那の、謡が唄へますわ。二ツ三ツ今でも知つて居りますよ。さあ
 おきやくさま
 御客様に一ツお聞かせなさいましなね。)

白痴は婦人を見て、又私が顔をぢろく見て、人見知をする
 といった形で首を振つた。」

第二十二

「左右して、婦人が、激ますやうに、賺すやうにして勧めると、白痴は首を曲げて彼の臍を弄びながら唄つた。

木曾の御嶽山は夏でも寒い、
 拾遣りたや足袋添へて。

(よく知つて居りませう、)と婦人は聞澄して莞爾する。

不思議や、唄つた時の白痴の声は此話をお聞きなさるお前様
 は固よりぢやが、私も推量したとは月鼈雲泥、天地の相
 違、節廻し、あげさげ、呼吸の続く処から、第一其の清らかな
 涼しい声といふ者は、到底此の少年の咽喉から出たのではない。
 先づ前の世の此白痴の身が、冥途から管で其のふくれた腹へ通は
 して寄越すほどに聞えましたよ。

わしかしこま
私は畏つて聞き果てると膝ひざに手をついたツ切きり何うしても顔かほを上あげて其そこ処ふたりな男女みを見ることが出来ぬ、何か胸なながキヤキヤして、はらくと落らくる涙みした。

をんな
婦人は目早く見つけたさうで、

（おや、貴僧あなた、何うかなさいましたか。）

きふ
急きふにもものいはれなんだが漸々やうく、

（唯はい、何な、変つたことでもござりませぬ、私わしも嬢ぢやう様さまのことは

べつべつにお尋ね申たましませんから、貴女あなたも何なんにも問とふては下くださりますな

。）

しさい
と仔細しさいは語かたらず唯思たゞおもひ入いつて然さう言いふたが、実じつは以前いぜんから様子やうすでも知しれる、金きん釵さぎ玉よく簪さんをかざし、蝶衣てふいを纏まとふて、珠履しゆりを穿うがたば、

まさりさんに正に驪山に入つて陛下と相抱くべき豊肥妖艶の人が其男に對する取廻しの優しさ、隔なさ、親切さに、人事ながら嬉しくて、思はず涙が流れたのぢや。

すると人の腹の中を読みかねるやうな婦人ではない、忽ち様子を悟つたかして、

(貴僧は真個にお優しい。)といつて、得も謂はれぬ色を目に湛へて、ぢつと見た。私も首を低れた、むかふでも差俯向く。いや、行燈が又薄暗くなつて参つたやうぢやが、恐らくこりや白痴の所為ぢやて。

其時よ。

座が白けて、暫らく言葉が途絶えたうちに所在がないので、

唄うたひの太夫、退屈をしたと見えて顔の前の行燈を吸込むやうな大欠伸をしたから。

身動きをしてみな、

（寝ようちやあ、寝ようちやあ。）とよたく体を取扱ふわい。

（眠うなつたのかい、もうお寝か、）といつたが座り直つて弗と気がついたやうに四辺を眺めた。戸外は恰も真昼のやう、月の光は開け広げた家の内へはらくとさして、紫陽花の色も鮮麗に蒼かつた。

（貴僧ももうお休みなさいますか。）

（はい、御厄介にあいなります。）

(まあ、いま宿やどを寝ねかします、おゆつくりなさいましな。戸外おもてへ
 は近ちかうござんすが、夏なつは広い方ほうが結句けつこ宜ようございませう、私わたくしども
 は納戸なんどへ臥ふせりますから、貴僧あなたは此処こゝへお広くお寛くつろぎが可ようござ
 んす、一寸ちよいと待つて。)といひかけて衝つと立ち、つかくと足あし
 早やに土間どまへ下おりた、余あまり身のこなしが活くわつぱつであつたので、
 其その拍手ひやうしに黒髪くろかみが先さきを巻まいたまゝ、領うなへ崩くづれた。
 鬢びんをおさへて、戸とにつかまつて、戸外おもてを透すかしたが、独ひとり言ごと
 をした。

(おやくさつきうまの腹はらを潜くゞつた時ときぢや。)
 いかさま馬うまの腹はらを落おとしたさうな。)

第二十三

このをり
此折から下の廊下に登音がして、静に大跨に歩いたの
が寂として居るから能く。

やがこよう
聴て小用を達した様子、雨戸をばたりと開けるのが聞えた、手
うづばち
水鉢へ干杓の響。

「おゝ、積つた、積つた。」と呟いたのは、旅籠屋の亭主の声
である。

「ほゝう、此の若狭の商人は何処へか泊つたと見える、何か愉
もしろ
快い夢でも見て居るかな。」

「何うぞ其後を、それから、」と聞く身には他事をいふうちが

悶かしく、膠もなく続を促した。

「さて、夜も更けました、」といつて旅僧は又語出した。

「大抵推量もなさるであらうが、いかに草臥れて居つても

申上げたやうな深山の孤家で、眠られるものではない其に

少し氣になつて、はじめの内私を寝かさなかつた事もあるし、目

は冴えて、まじくして居たが、有繋に、疲が酷いから、心は少

し茫乎して来た、何しろ夜の白むのが待遠でならぬ。

其処ではじめの内は我ともなく鐘の音の聞えるのを心頼み

にして、今鳴るか、もう鳴るか、はて時刻はたつぷり経つたもの

をと、怪しんだが、やがて氣が着いて、恁云ふ処ぢや山寺処で

はないと思ふと、俄に心細くなつた。

其その時ときは早はや、夜よるがものものに譬たとへると谷たにの底そこぢや、白痴ばかがだらしないない寢息ねいきも聞きえなくなると、忽たちち戸まの外とにももの、氣勢けいひがして来きた。

獸けものの足あし音おとのやうで、然さまで遠とほくの方ほうから歩行あるいて来きたのでは
ないやう、猿さるも、蟻ひきも居ゐる処ところと、氣休きやすめに先まづ考かんへたが、なかな
か何どうして。

暫しばらくすると今いま其そ奴やつが正しやう面めんの戸とに近ちかづいたなと思おもつたのが、羊ひつじの啼な
聲きこゑになる。

私わしは其その方ほうを枕まくらにして居ゐたのぢやから、つまり枕まくら元もとの戸外おもて
ぢやな。暫しばらくすると、右め手の彼かの紫陽花あぢさいが咲さいて居ゐた其その花はなの下した
あたりで、鳥とりの羽はばたきする音おと。

むさゝびか知らぬがきツ〜といつて屋の棟へ、臈て凡そ小山
 ほどあらうと気取られるのが胸を圧すほどに近いて来て、牛が啼
 いた。遠く彼方からひた〜と小刻に駈けて来るのは、二本
 足に草鞋を穿いた獣と思はれた、いやさまざまにむら〜と家
 のぐるりを取巻いたやうで、二十三十のものゝ鼻息、羽音、中
 には囁いて居るのがある。恰も何よ、それ畜生道の地獄の絵
 を、月夜に映したやうな怪の姿が板戸一重、魑魅魍魎といふの
 であらうか、ざわ〜と木の葉が戦ぐ気色だつた。

息を凝すと、納戸で、

(うむ、)といつて長く呼吸を引いて一声、魔れたのは婦人ぢや。
 (今夜はお客様があるよ。)と叫んだ。

(お客様があるぢやないか。)

しばらくた
と暫く経つて二度目のは判然と清しい声。

極めて低声で、

(お客様があるよ。)といつて寝返る音がした、更に寝返る

音がした。

戸の外のものゝ氣勢は動揺を造るが如く、ぐらくと家が揺

いた。

私は陀羅尼を呪した。

若不順我咒 恼乱説法者 頭破作七分

如阿梨樹枝 如殺父母罪 亦如厭油殃

斗秤欺誰人 調達僧罪犯 犯此法師者

当獲如是殃

と一心不乱。颯と木の葉を捲いて風が南へ吹いたが、忽ち静り返つた、夫婦が閨もひツそりした。」

第二十四

「翌日又正午頃、里近く、瀧のある処で、昨日馬を売に行つた親仁の帰に逢ふた。

丁度私が修行に出るのを止して孤家に引返して、婦人と一所に生涯を送らうと思つて居た処で。

実を申すと此処へ来る途中でも其の事ばかり考へる、蛇の橋も

幸さいはひになし、蛭ひるの林はやしもなかつたが、道みちが難なんじふ渋じふなにつけても汗あせが流ながれて心こゝろ持もちが悪いわるにつけても、今いま更さら行あんぎや脚つまも詰つまらない。紫むらさきの袈裟けさをかけて、七堂だうがらん伽藍がらんに住すんだ処ところで何なに程ほどのこともあるまい、活いき仏ほとけ様さまぢやといふてわあ〜拜おがまれ〜ば人ひといきれで胸むねが悪わるくなるばかりか。

些ちとお話はなしもいかゞぢやから、前ま刻さつきはことを分わけていひませなんだが、昨ゆうべ夜よも白痴ばかを寝ねかしつけると、婦をんな人なが又また炉いろのある処ところへやつて来て、世よの中なかへ苦く勞らうをして出でやうより、夏なつは涼すずしく、冬ふゆは暖あたい、此この流ながれと一しよ所わたしに私そぼの傍そばにおいでなさいといふてくれるし、まだノそれ其まばかりでは自じ身ぶんに魔まが魅ましたやうぢやけれども、こゝに我わが身みで我わが身みに言い訳ひわけが出来できるといふのは、頻しきりに婦をんな人なが不ふ便びんでならぬ、

深山しんざんの孤家ひとつやに白痴ばかの伽ときをして言葉ことばも通つうぜず、日ひを経ふるに従したがふ
 てものをいふことさへ忘わすれるやうな氣きがするといふは何なんたる事こと！
 殊ことに今朝けさも東雲しのゝめに袂たもとを振りふりき
 しや、かやうな処ところに慍かうやつて老朽おひくちる身みの、再ふたびお目めにはかゝ
 られまい、いさゝ小川をがはの水みづとなりとも、何どこ処どこぞで白桃しろもの花はなが流なが
 れるのを御覽ごらんになつたら、私わたしの体からだが谷川たがはに沈しづんで、ちぎれくに
 なつたことゝ思おもへ、といつて、悄しほれながら、なほ親切しんせつに、道みちは
 唯此ただこゝの谷川たがはの流ながれに沿そふて行きゆきさへすれば、何どれほど遠とほくても里さとに
 出でらるゝ、目めの下した近く水みづが躍おどつて、瀧たきになつて落おつるのを見みたら、
 人家じんかが近ちかづいたと心こゝろを安やすずるやうに、と氣きをつけて孤家ひとつやの見みえな
 くなつた辺あたりで指ゆびをしてくれた。

そのて 其手と手を取交はずには及ばずとも、傍につき添つて、朝夕
 はなしあひて きのこしる ござん 話が対手、蕈の汁で御膳を食べたり、私が櫛を焚いて、婦人が
 なべ 鍋をかけて、私が木の実を拾つて、婦人が皮を剥いて、それから
 しやうじ 障子の内と外で、話をしたり、笑つたり、それから谷川で二人
 そのとき して、其時の婦人が裸体になつて、私が背中へ呼吸が通つて、
 びめう かほりはな 微妙な薫の花びらに暖に包まれたら、其まゝ命が失せても可い！
 たき みづ み 瀧の水を見るにつけても耐へ難いのは其事であつた、いや、
 ひやあせ 冷汗が流れます。

そのうへ 其上、もう気がたるみ、筋が弛んで、早や歩行くのに飽が来
 よろこ てるこ 喜ばねばならぬ人家が近いたのも、高がよくされて口の臭い婆
 しぶちや さんに 渋茶を振舞はれるのが関の山と、里へ入るのも厭になつ

たから、石の上へ膝を懸けた、丁度目の下にある瀧ちやつた、
 これがさ、後に聞くと女夫瀧と言ふさうで。

真中に先づ鰐鮫が口をあいたやうな尖のどがつた黒い大
 巖が突出て居ると、上から流れて来る颯と瀬の早い谷川が、之
 に当つて両に岐れて、凡そ四丈ばかりの瀧になつて哄と落ちて、
 又暗碧に白布を織つて矢を射るやうに里へ出るのぢやが、其
 巖にせかれた方は六尺ばかり、之は川の一巾を裂いて糸も乱れず、
 一方は巾が狭い、三尺位、この下には雑多な岩が並ぶと見えて、
 ちらくちらくと玉の簾を百千に砕いたやう、件の鰐鮫
 の巖に、すれつ、纏れつ。」

第二十五

「唯一筋でも岩を越して男瀧に縫りつかうとする形、それでも中
 を隔てられて末までは雫も通はぬので、揉まれ、揺られて具さに
 辛苦を嘗めるといふ風情、此の方は姿も窈れ容も細つて、流るゝ
 音さへ別様に、泣くか、怨むかとも思はれるが、あはれにも優
 しい女瀧ぢや。」

男瀧の方はうらはらで、石を砕き、地を貫く勢、堂々たる有
 様ぢや、之が二つ件の巖に当つて左右に分れて二筋となつて落
 ちるのが身に浸みて、女瀧の心を砕く姿は、男の膝に取つて美
 女が泣いて身を震はすやうで、岸に居てさへ体がわなゝく、肉が

跳る。況して此の水みな上かみは、昨日孤家の婦人と水を浴びた処ところと
 思ふと、氣の精せいか其その女め瀧たきの中なかに絵ゑのやうな彼かの婦人をんなの姿すがたが歴あり
 々、と浮ういて出でると巻ま込まれて、沈しづんだと思おもふと又浮またういて、千
 筋すぢに乱みだるゝ水みづとゝもに其その膚はだが粉こに碎くだけて、花はな片びらが散ちり込むやう
 な。あなやと思おもふと更さらに、もとの顔かほも、胸むねも、乳ちちも、手足てあしも全まき
 姿すがたとなつて、浮ういつ沈しづみつ、ぱつと刻きざまれ、あつと見る間まに又また
 らはれる。私わしは耐たまらず真ま逆さかに瀧たきの中なかへ飛とび込んで、女め瀧たきを確しかと
 抱だいたとまで思おもつた。氣きがつくと男をとこ瀧たきの方ほうはどうくくと地ぢ響びび打きう
 たせて、山彦やまびこを呼よんで轟とどろいて流ながれて居ゐる、あゝ其そちからもつな故なげ
 救すくはぬ、儘まよ！

瀧たきに身みを投なげて死しなうより、旧もとの孤家ひとつやへ引返ひっかへせ。汚けがらはしい慾よく

なんにも言はず急きふにもものいはれないでみまも瞻ると、親仁おやぢはじつと顔かほを見たよ。然さうしてにやくと、又また一通とほりの笑わらひかた方かたではないて、薄うすきみわる気味の悪い北叟ほくそゑみ笑わらひをして、

（何をなにしてござる、御修行ごしゆぎやうの身みが、この位くらゐの暑あつさで、岸きしに休やすんで居ゐさつしやる分ぶんではあんめえ、一生しやうけんめい懸命あに歩ある行あるかつしやりや、昨夜ゆふべの泊とまりから此こゝ処こゝまではたつた五里り、もう里さとへ行いつて地蔵ぢざうさま様さまををが拜をがまつしやる時刻じこくぢや。

何なんぢやの、己おらが嬢ぢやうさま様さまに念おもひかが懸かつて煩ほんなう悩なうが起おきたのぢやの。うんにや、秘かくさつしやるな、おらが目めは赤あかくツても、白しろいか黒くろいかはちやんと見みえる。

地体ぢたいなみ並なみのものならば、嬢ぢやうさま様さまの手てが触さはつて那あの水みづを振舞ふるまはれ

て、今まで人間で居やう筈はない。

牛か馬か、墓か、猿か、蝙蝠か、何にせい飛んだか跳ねたか

せねばならぬ。谷川から上つて来さした時、手足も顔も人ぢや

から、おらあ魂消た位、お前様それでも感心かんしんこころざしけんごに志が堅固ぢや

から助かつたやうなものよ。

何と、おらが曳ひいて行つた馬を見さしつたらう、それで、孤ひとり

家で来さつしやる山路やまみちで富山の反魂丹はんこんたん売うりに逢あはしつたとい

ふではないか、それ見さつせい、彼の助すけ倍野郎べいやろう、疾とうに馬うまになつ

て、それ馬市うまいちで銭おあしになつて、お銭あしが、そうら此この鯉こひに化ばけた。

大好物だいかうぶつで晩飯ばんめしの菜さいになさる、お嬢ぢやうさま様さまを一体たいなん何なんじやと思おもは

つしやるの。」

わたしおも
私は思はず遮つた。

「お上人？」

第二十六

上人は領きながら呟いて、

「いや、先づ聞かつしやい、彼の孤家の婦人といふは、旧な、
これも私には何かの縁があつた、あの恐い魔処へ入らうといふ岐
道の水が溢れた往来で、百姓が教へて、彼処は其の以前
医者の家であつたといふたが、其の家の嬢様ぢや。

何でも飛騨一円当時變つたことも珍らしいこともなかつたが、

唯取出で、いふ不思議は、此の医者いしやの娘むすめで、生れると玉たまのやう。

母親おふくろ殿どのは 頬ほ板ツペのふくれた、眈めじりの下さがつた、鼻はなの低ひくい、俗ぞくに

さし乳ちといふあの毒どく々々しい左右さいうの胸むねの房ふさを含ふくんで、何どうして

彼あれほど美うつくしく育そだつたものだらうといふ。

昔むかしから物ものがたり語ほんの本ほんにもある、屋やの棟むねへ白羽しらばの征矢そやが立たつか、

然さもなければ狩かり倉くらの時とき貴あて人びとのお目めに留とまつて御殿ごてんに召出めしだされ

るのは、那あんな麼なのぢやと噂うはさが高たかかつた。

父て親おやの医者いしやといふのは、頬ほ骨ほねのどがつた髯ひげの生はへた、見得みえ

坊ぼうで傲慢がうまん、其その癖くせでもぢや、勿論もちろん田舎ゐなかには疳かり入いれの時ときよく稲いね

の穂ほが目めに入はいると、それから煩わづらう、脂目やにめ、赤目あかめ、流行目はやりめが多い

から、先せん生せい眼がん病びやうの方は少すこし遣やつたが、内科ないくわと来きてはから

つぺた。外科げくわなんと来た日きひにやあ、鬢びんつけ付へ水みづを垂たらしてひやりと疵きずにつける位くらゐな処ところ。

鯛いわしの天窓あたまも信しん心しんから、其それでも命めい数すうの尽つきぬ輩やからは本ほん復ぷくするから、外ほかに竹庵ちくあん養やう仙せん木もく斎さいの居ゐない土地とち、相さう応おうに繁はん昌じやうした。

殊ことに娘むすめが十六七をんな、女をんな盛さかとなつて来きた時じふん分ぶんには、薬やく師し様さまがひとだす人ひと助すけに先せん生せい様さまの内うちへ生うまれてござつたといつて、信しん心しん渴かつがう仰うやうの善ぜん男なん善ぜん女にょ? 病びやう男なん病びやう女ぢよが我われも我われもと詰つめ懸かける。

其それといふのが、はじまりは彼かの嬢ぢやう様さまが、それ、馴なじ染みの病びやう人にんには毎まい日にち顔かほを合あはせる所ところから、愛あい相さうの一つも、あなたお

て手が痛みますかい、甚麼でございます、といつて手先へ柔な掌が
 さは、だいいちばん障ると第一番に次作兄じさくあにいといふ若いわかの、（りやうまちす）が
ぜんくわい全快、お苦しうなといつて腹はらをさすつて遣やると水みづあたりの
さしこみ差込の留とまつたのがある、初手しよては若い男わかをとこばかりに利きいたが、段だ
ん／＼としより老人にも及およぼして、後のちには婦人をんなの病びやうにん人もこれで復なほ
なほ復なほらぬまでも苦痛いたみが薄うすらぐ、根太ねふとの膿うみを切きつて出だすさへ、錆さびびた
こがたな小刀ひつさで引裂いしやどのく医者うてまへ殿うてまへが腕うでまへ前まへぢや、病びやうにん人びやうにんは七顛てん八倒たうして
ひめい悲鳴あを上げるのが、娘むすめが来きて背せなか中なかへびつたりと胸むねをあて、肩かたを押おさ
あへて居ゐると、我慢がまんが出来できる、といつたやうなわけであつたさうな。
しきりあ一時まへ彼の藪やぶの前まへにある枇杷びはの古木ふるきへ熊蜂くまばちが来きて可おそろし恐おほきい大おほき
す巢すをかけた。

すると、いしや 医者の内弟子で、やくきよく 薬局、ふきさうぢ 拭掃除もすれば、さうざいばた 総菜
けいも 畠の芋も堀る、ちかところ 近い所へは車夫も勤めた、げなんけんたい 下男兼帯の熊蔵
といふ、そのころ 其頃二十四五歳、きあんさん 稀塩散に単舍利別を混ぜたのを
びんぬす 瓶に盗んで、うち 内が吝嗇ぢやから見附かると叱られる、これ 之を股引
はかま や袴と一所に戸棚の上のに載せて置いて、ひま 隙さへあればちびりく
のと飲んでた男が、にはさうじ 庭掃除をするといつて、くだんはち 件の蜂の巣を見つ
たつけ。

えんがは 椽側へ遣つて来て、ぢやうさま お嬢様、おもしろ 面白いことをしてお目に懸
けませう、ぶしつけ 無様でござりますが、わたしこ 私の此の手を握つて下さりま
すと、あ 彼の蜂の中へ突込んで、はちつか 蜂を掴んで見せましやう。お手が
さは 障つた所だけは刺しましても痛みませぬ、たけぼうき 竹箒で引払いて

は八方へ散つて、体中に集られては夫は凌げませぬ即死でござ
 いますかと、微笑んで控へる手で無理に握つて貰ひ、つか／＼と
 行くと、凄じい虫の唸、聽て取つて返した左の手に熊蜂が七ツ
 八ツ、羽ばたきをするのがある、脚を揮ふのがある、中には掴ん
 だ指の股へ這出して居るのがあつた。

さあ、那の神様の手が障れば鉄砲玉でも通るまいと、蜘蛛
 の巢のやうに評判が八方へ。

其の頃からいつとなく感得したものと見えて、仔細あつて、
 那の白痴に身を任せて山に籠つてからは神変不思議、年を経るに
 従ふて神通自在ぢや、はじめは体を押つけたのが、足ばかりと
 なり、手さきとなり、果は間を隔てゝ居ても、道を迷ふた旅人は

嬢ぢやうさま様が思おもふまゝはツといふ呼吸いきで變へんずるわ。

と親仁おやぢが其そのときもの時物語ものがたつて、御坊ごぼうは、孤家ひとつやの周圍ぐるりで、猿ざるを見たみ

らう、蟄ひきを見たらう、蝙蝠かうもりを見たであらう、兎うさぎも蛇へびも皆嬢みなぢやうさま様

に谷川たにがはの水みづを浴あびせられて、畜生ちくしやうにされたる輩やから！

あはれ其そのとき時那あの婦人をんなが、蟄ひきまつはに絡かられたのも、猿ざるに抱だかれたの

も、蝙蝠かうもりに吸すはれたのも、夜中よなかに※魅魍魎ちみまうりやうに魘おそはれたのも、

思出おもひだして、私わしは犇ひしく々と胸むねに當あたつた、

なほ親仁おやぢのいふやう。

今いまの白痴ばかも、件くだんの評判ひやうばんの高たかかつた頃ころ、医者いしやの内うちへ来たき病びやう

人にん、其そのころ頃まは未だこども子供ぼくとつ、朴訥て、おやな父親つきそが附添かみひ、髪ながの長い、

兄貴あにきがおぶつて山やまから出でて来きた。脚あしに難渋なんじうな腫物しゆもつがあつた、其そ

の療治を頼んだので。

固より一室を借受けて、逗留をして居つたが、かほどの悩は
 おほごと 大事ぢや、血も大分に出さねばならぬ殊に子供手を下ろすには
 からだせいぶん 体に分をつけてからと、先づ一日に三ツづゝ鶏卵を飲まして、
 きやす 気休めに膏薬を張つて置く。

其の膏薬を剥がすにも親や兄、又傍のものが手を懸けると、
 かた 堅くなつて硬ばつたのが、めりゝと肉にくツついて取れる、ひ
 いゝと泣くのぢやが、娘が手をかけてやれば黙つて耐へた。

一体は医者殿、手のつけやうがなくなつて、身の衰をいひ立て
 にちの 一日延ばしにしたのぢやが三日経つと、兄を残して、克明な
 て、おや 父親の股引の膝でずつて、あとさがりに玄関から土間へ、

草鞋わらぢを穿はいて又また地に手てをついて、次男坊じなんぼうの生命いのちの扶たすかりまするやうに、ねえく、といふて山やまへ歸かへつた。

其それでもなかく抄取はかどらず、七日なぬかも経たつたので、後あとに残のこつて附添つきそ

つて居ゐた兄者人あにじやひとが丁度ちやうど菊かりいれ入いで、此この節せつは手てが八本ほんも欲ほしい

ほど忙いそがしい、お天氣てんき模様もやうも雨あめのやう、長なが雨あめにでもなりますと、

山やま 畠はたけ にかげがへのない稲いねが腐くさつては、餓うゑ死じでござりまする、

総さうりやう 領りやう の私わしは一番ばんの働はたらき手て、かうしては居をられませぬから、

と辞ことわりをいつて、やれ泣なくでねえぞ、としんめり子供こどもにいひ聞きかせ

て病びやう 人にんを置おいて行いつた。

後あとには子供こどもひとり、其その時ときが戸長こちやう様さまの帳ちやうめん面まへ前とし年ねん紀き六ろくツ、親おや

六十むそで児こが二十にじゅうなら徴ちやうへい 兵へいはお目めこぼしと何なにを間違まちがへたか届とどけ

五年ねおそ遅おそうして本ほん当たうは十一、それでも奥おく山やまで育そだつたから村むらの言こと
 とばろく葉はも碌ろくには知しらぬが、怜り惻こうな生うで聞き分わけがあるから、三ツづつあ
 ひかはらず鶏たまご卵ごを吸すはせられる汁つゆも、今いまに療れう治ちの時とき不こ残ら血ちにな
 つて出でること、推す量ありやうして、ベそを搔かいても、兄あに者じやが泣なくな
 といはしつたと、耐こへて居ゐた心こころの内うち。

むすめなさけうち、娘むすめの情なさけで内うちと一しよ所ぜんに膳ならを並ならべて食しよ事くじをさせると、沢たく庵わんの切き
 をくわへて隅すみの方ほうへ引ひ込きこむいぢらしさ。

いよいよあす、弥いよ明日あすが手しゆ術じゆつといふ夜よは、皆みん寝ね静しづまつてから、しくく
 蚊かのやうに泣ないて居ゐるのを、手てう水づに起おきた娘むすめが見みつけてあまりの
 不ふ便びんさに抱だいて寝ねてやつた。

さて療れう治ちとなると例れいの如ごとく娘むすめが背う後しろから抱だいて居ゐたから、脂あぶら

汗あせを流ながしながら切れものが入はいるのを、感かん心しんにじつと耐こらへたの
 に、何どこ処こを切きり違ちがへたか、それから流ながれ出だした血ちが留とまらず、見み
 るく内うちに色いろが變かはつて、危あぶなくなつた。

医い者しやも蒼あをくなつて、騒さわいだが、神かみの扶たすけか漸やうやう生命いのちは取とり留とまり、
 三か日にちばかりで血ちも留とまつたが、到たうとう頭こし腰ぬが抜ぬけた、固もとより不かたわ具わ。
 之これが引ひき摺ずつて、足あしを見みながら情なさけなさうな顔かほをする、蟋きり蟀すが
 がれた脚あしを口くちに啣くはへて泣なくのを見みるやう、目めもあてられたもの
 ではない。

しまひには泣なき出だすと、外ぐわい聞ぶんもあり、少すこ焦ぢれで、医い者しやは可おそろ
 恐おそい顔かほをして睨にらみつけると、あはれがつて抱だきあげる娘むすめの胸むねに
 顔かほをかくして縋すがる状さまに、年ねん来らい随ず分ぶんと人ひとを手てにかけた医い者しやも我が

を折つて腕組をして、はツといふ溜息。

聽て父親が迎にござつた、因果と諦めて、別に不足はいは

なんだが、何分小児が娘の手を放れようといはぬので、医者も

幸、言訳旁、親兄の心もなだめるため、其処で娘に小児を家

まで送らせることにした。

送つて来たのが孤家で。

其時分はまだ一ケの荘、家も小二十軒あつたのが、娘が来て

一日二日、つひほだされて逗留した五日目から大雨が降出し

た。瀧を覆すやうで小留もなく家に居ながら皆蓑笠で凌いだ位、

茅葺の繕をすることは扱置いて、表の戸もあけられず、内から

内、隣同士、おうくと声をかけ合つて纔に未だ人種の世に

つきぬのを知るばかり、八日を八百年と雨の中に籠ると九日目の真夜中から大風が吹出して其風の勢こゝが峠といふ処で忽ち泥ろうみ海。

此の洪水で生残つたのは、不思議にも娘と小児と共に其時村から供をした此の親仁ばかり。

同一水で医者の内も死絶えた、さればかやうな美女が片田舎に生れたのも国が世がはり、代がはりの前兆であらうと、土地のものは言伝へた。

嬢様は帰るに家なく世に唯一人となつて小児と一所に山に留まつたのは御坊が見らるゝ通、又那の白痴につきそつて行届いた世話も見らるゝ通、洪水の時から十三年、いまになるまで一

日にちもかはりはない。

といひ果はて、親おやぢ仁またきみの又また気味わるの悪いほくそゑみ北ほく叟そゑみ笑わら。

(憊かみみううへの上はなを話はなしたら、嬢ぢやうさま様さまを不ふ便びんがつて、薪まきを折をつたり

水みづを汲くむ手て扶たすけでもしてやりたないと、情なさけが懸からう。本ほん来らいの好すきご

心こゝろ、可い加か減げんな慈じ悲ひぢやとか、情なさけぢやとかいふ名なにつけて、一

層そやま山かへへ歸かへりたかんべい、はて措をかつしやい。彼あの白ばかど痴の殿にようぼの女にようぼ

房うになつて、世よの中なかへは目めもやらぬ換かはりにやあ、嬢ぢやうさま様さまは如によう意よゐ

自じ在ざい、男をとこはより取とつて、飽あけば、息いきをかけて獸けものにするわ、殊ことに其そ

の洪水こうずぬらい以来やま、山うがを穿うがつたこの流ながれは天てん道たう様さまがお授さづけの、男をとこを誘いざなふ

怪あやしみづの水いのち、生いのち命とを取とられぬものはないのぢや。

天てん狗ぐ道たうにも三ねつ熱くの苦く惱なう、髪かみが乱みだれ、色いろが蒼あをざめ、胸むねが瘦やせて

てあしほそ 手足が細れば、谷川を浴びると旧の通、其こそ水が垂るばかり、
 まね 招けば活きた魚も来る、睨めば美しい木の実は落つる、袖を翳せ
 あめふる ば雨も降なり、眉を開けば風も吹くぞよ。
 しか 然もうまれつきの色好み、殊に又若いのが好ぢやで、何か御
 ぼう 坊にいうたであらうが、其を突とした処で、臆て飽かれると尾が
 でき 出来る、耳が動く、足がのびる、忽ち形が変ずるばかりぢや。
 いや、臆て此の鯉を料理して、大胡座で飲む時の魔神の姿を
 み 見せたいな。

まうねん 妄念は起さずに早う此処を退かつしやい、助けられたが不
 ぎくらの 議な位、嬢様別してのお情ぢやわ、生命冥加な、お若い
 きつ 屹と修行をさつしやりませ。と又一ツ背中を叩いた、親仁

は鯉こひを提さげたまゝ見向みむきもしないで、山路やまちを上うへの方かた。

見送みおくると小ちいさくなつて、一坐ざの大おほ山やまの背うしろ後ごへかくれたと思おもふ

と、油あぶらで早はやの焼やけるやうな空そらに、其その山やまの巔いたゞきから、すく〜と

雲くもが出でた、瀧たきの音おとも静しづまるばかり殷あん々くとして雷らいの響ひびき。

藻も抜ぬけのやうに立たつて居ゐた、私わたしが魂たましひは身みに戻もどつた、其方そなたを拜をがむ

と齊ひとしく、杖つえをかい込こみ、小笠をかを傾かたむけ、踵くびすを返かへすと慌あはたしく、一散さん

に駆かけ下おりたが、里さとに着ついた時じぶん分んは山やまは驟ゆふ雨だち、親おや仁ぢが婦をんな人に齋もた

らした鯉こひもこのために活いきて孤ひと家つやに着ついたらうと思おもふ大おほ雨あめで

あつた。」

高野聖かうやひじりは此このことについて、敢あへて別べつに註ちゆうして教をしを与あたへはしな

かつたが、翌よくて朝あした袂もとを分わかつて、雪せつ中ちゆう山やま越ごしにかゝるのを、名残なごり惜を

しく見送ると、ちらくくと雪の降るなかを次第に高く坂道を上
る聖の姿、恰も雲に駕して行くやうに見えたのである。

青空文庫情報

底本：「新編 泉鏡花集 第八卷」岩波書店

2004（平成16）年1月7日第1刷発行

底本の親本：「高野聖」左久良書房

1908（明治41）年2月20日

初出：「新小説 第五年第三卷」春陽堂

1900（明治33）年2月1日

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ケ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

※表題は底本では、「高野聖《かうやひじり》」となっています。

※初出時の署名は「鏡花小史」です。

入力：砂場清隆

校正：門田裕志

2007年2月12日作成

2016年2月22日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waazora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

高野聖

泉鏡太郎

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>